

明代の蒙古

——特に中三邊及び西三邊の會首について——

和田清

一 賽音阿拉克の諸子

明代には蒙古に對する防備が最も重要だったので、特に北邊に對して九邊鎮といふものを設けて之を禦いだ。明史卷九一兵志、邊防の條に

初設遼東・宣府・大同・延綏四鎮、繼設寧夏・甘肅・薊州三鎮、而大同總兵治偏頭、三邊制府駐固原、亦稱二鎮、是爲九邊。

とあるのが是れである。明の瞿九思の萬曆武功錄七、八、九の三卷には中三邊と稱して、宣府・大同・山西（偏頭關）三邊の邊外の虜酋のことを記し、次ぎに十、十一、十二、十三の四卷には、東三邊と名づけて、薊鎮・遼東の邊外、即ち興安嶺東の酋首の朶顔三衛や察哈爾(Chakar)部・科爾沁(Khorchin)部等のことを述べ、最後に十四卷には西三邊(實は延綏・寧夏・固原・甘肅四鎮)と名づけて、専ら黄河套即ち鄂爾多斯(Ordos)部のことを記してゐる。その中、東三邊のことは既に別に敘べたから、こゝには略し、例に従つて他の記録をも參照しながら、専らその中三邊及び西三邊のことを考へて見よう。

蒙古では達延汗の生時に長子圖魯博羅特 (Toro Bolod 鐵力擺戶) は先き立つて死し、長孫博迪阿拉克汗 (Bodi Alak Khan 不地台吉) が察哈爾汗を嗣いだが、次子烏魯斯博羅特 (Ulus Bolod 五路土台吉) は右翼濟農に任せられると同時に弑せられて死し、三子巴爾斯博羅特 (Bars Bolod) が代つて右翼濟農になつた。巴爾斯博羅特は乃ち賽音阿拉克 (Sain Arak 賽那刺) と稱し、達延汗の死後、一時汗位を篡奪したかに見えたが、間もなく死し、その諸子が亡父賽音阿拉克の餘威を假りて、恣に右翼の諸地を制馭した。乃ち蒙古源流^{卷六}に、

巴爾斯博羅特之子、衮必里克墨爾根濟農 (Gün Bilik Mergen Jimong) ・阿勒坦汗 (Altan Khan) ・拉布克台吉 (Labuk Taiji) ・巴雅斯哈勒昆都楞汗 (Bayas-Khal Kündüle Khan) ・巴延達喇納琳台吉 (Bayandara Narin Taiji) ・博第達喇鄂特罕台吉 (Bodidara Odkhan Taiji) ・塔刺海台吉 (Tarakhai Taiji) 等共兄弟七人。長子衮必里克墨爾根濟農丙寅年^(正德元年)生、佔據鄂爾多斯萬人而居、阿勒坦汗丁卯年^(正德三年)生、佔據十二土默特而居。拉布克台吉己巳年^(正德四年)生、佔據土默特之烏古新而居。巴雅斯哈勒庚午年^(正德五年)生、佔據永謝布之七鄂托克喀喇沁而居。巴延達喇壬申年^(正德七年)生、佔據察哈爾之察罕塔塔爾而居。博第達喇甲戌年^(正德九年)生、……遂將阿蘇特・永謝布二處、令博第達喇佔據而居。塔喇海幼亡。

と見えるものが是れである。さうして蕭大亨の北虜風俗(夷俗記)に附した北虜世系にも、譯字面は違ふが、殆ど同様に見えてゐる。その中長子衮必里克墨爾根濟農即ち明人の所謂吉囊^(濟囊の別譯)と次子阿勒坦汗即ち俺答と及び第四子巴雅哈勒昆都楞汗即ち老把都とが特に有名であつたことはいふまでもない。葉向高の四夷考^七北虜考には之を概言して曰く、

是時、小王子最富強、控弦十餘萬、多畜黃金犀毗、稍厭兵。其連歲深入、蹂西北邊、皆其別部、酋曰吉囊、曰俺答、二酋亦元裔、于小王子爲從父行。其大父曰歹顏哈、有十一子。次曰賽那刺、有七子。長吉囊、次俺答、皆雄點善兵。

吉發壁河套、名禎兒都司、直關中。俺答壁豐州灘、直代・雲中。吉發・俺答各九子、子各萬騎。其弟老把都亦數萬騎。壁張家口。諸昆從百十、皆有分地、率盜邊自肥、日益強盛。

といふ。是時といふのは嘉靖の中葉をいつたのである。また萬曆武功錄^七には

阿著生六子、長吉發、次俺答、次兀慎一克打兒汗那言、次老把都、次那林台吉、次我托那言。

とある。吉發は濟農、俺答は阿勒坦、兀慎一克打兒汗那言は拉布克台吉、老把都は昆都楞汗、那林台吉は納琳台吉、我托那言は鄂特罕台吉で、塔喇海の天死したから、數へない。兀慎一克打兒汗那言や那林台吉・我托那言等のことについては後に説かう。

二 阿蘇特 永謝布

今まづその東邊張家口邊外の部落から考へて見よう。魏煥の皇明九邊考^五大同鎮の邊夷考に曰く、

北虜哈喇眞・哈連二部、常在此邊住牧。哈喇眞部下爲營者一、大會把答罕奈領之、兵約三萬。哈連部下爲營者一、大會失喇台吉領之、兵約二萬。入寇無常、近來套虜出套、亦同此虜入寇。

これは鄭曉の皇明北虜考に纏めて書いてあるところと同じであつて、哈喇眞部即ち哈喇眞部の大會把答罕奈といふのは、後にいふ、哈喇眞部の大會大把都兒、昆都楞汗のことであるが、哈連部といふのは實は武功錄^七にいふ如く哈連部即ち阿速部（阿蘇特）の訛であつて、失喇台吉はその酋長なのであらう。蒙古源流^六によれば、阿蘇特（Asod）永謝布（Jungshiyabo）の地はもと達延汗の子烏巴撒察（Ubasanja）の封ぜられた所であるが、後にその姪博第達喇のために併吞せられたのである。その始末を説いて曰く、

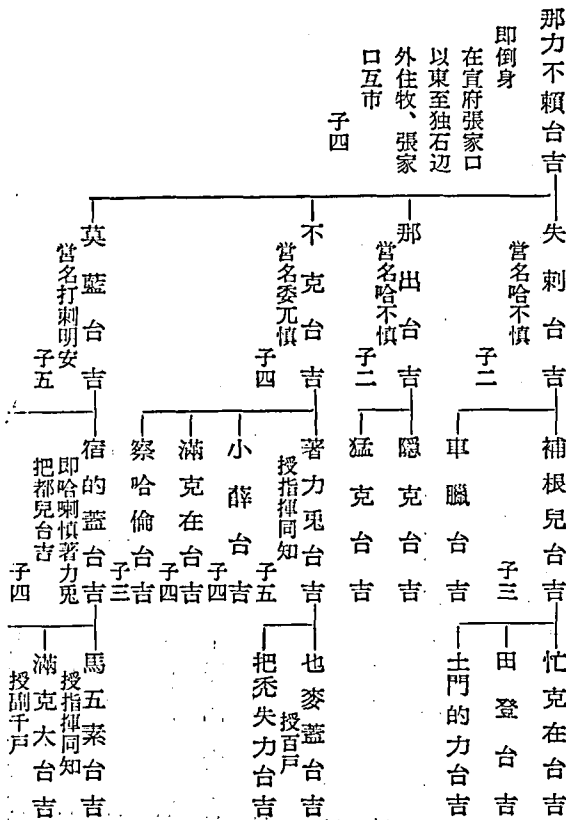
博第達喇甲戌年生、幼時曾戲作歌、有欲阿濟 (Achi)・實喇 (Shia) 二人勦滅、佔據阿蘇特・永謝布而居之語、因烏巴徹察青台吉之子實喇兄弟相殘、實阿濟以殺弟之罪、而實喇無嗣被害、衆議以爲歌驗。遂將阿蘇特・永謝布二處、令博第達喇佔據而居。

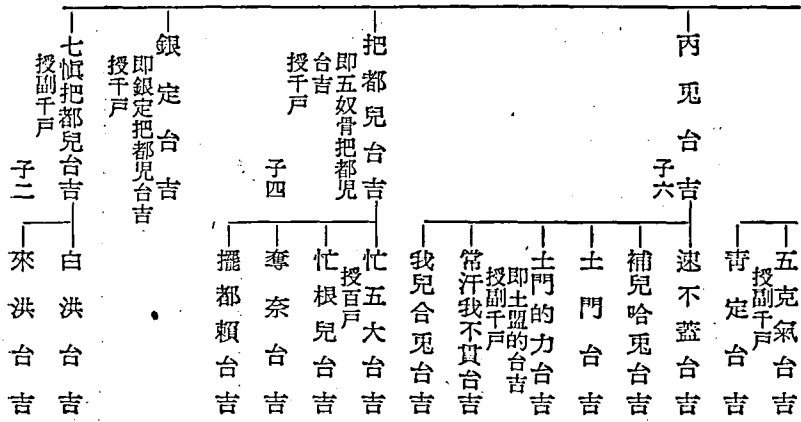
といふ傳説を載せてゐる。恐らく哈連部の失刺台吉はこの實喇台吉であらう。岷峨山人の譯語によれば、嘉靖の初め小王子が西北の兀良哈を搶殺したことを説いた條に、隨征の諸酋名を擧げて、「把都兒台吉、納林台吉、成台青、血刺台吉部下孛蒙、皮模爲號、莽晦、俺探、己寧諸酋」とあり、この酋首名は恐らく小王子に近い東方から數へたものと思はれるが、その中己寧・俺探及び把都兒台吉がそれぞれ吉囊・俺答及び老把都の兄弟であつて、納林台吉がこの兄弟の弟巴延達喇納琳台吉に比定せらるべきことは疑なく、莽晦とは東蒙古の泰寧の地にゐた滿會王であらうから、殘りの成台青及び血刺台吉を以つて當時の強酋吉囊兄弟の季父青台吉及びその子の實喇台吉父子なりと爲すことは自然であらう。なほ實喇台吉と覺しき者のことは趙時春の北虜紀略の中にも、「虜酋名目」として「昔馬台吉獨石邊外虜酋子」とあり、或は「錫刺台吉夷酋」ともある。青台吉のことも「虜酋名目」中に見えて、「青台吉小王子部下、是吉囊子、疑有二名、或俺答借名以脅我」とも見えてゐる。その青台吉のことは世宗實錄嘉靖二十五年六月辛丑の條にも兵科都給事中扈永通の疏を載せて、

近來三關宣大邊備、頗皆改觀。惟劔遼延綏、時有警報、聞青台吉候月滿、欲東則潮河・白羊・古北・喜峯、當戒嚴矣、云々。とあるから、この頃まで青台吉は繁榮したのであらう。然るに源流によれば、その實喇台吉が兄弟相殘害し、遂に兄阿濟のために殺され、後嗣がなかつたので、その地はやがて從兄博迪達喇の佔據するところとなつたといふ。失刺台吉死し、哈連(阿蘇特)營の滅亡した年次は固より明白を缺いてゐるが、青台吉の生時なる嘉靖二十五年よりは以後であつて、しかも二十六年の小王子の東遷には多く後れなかつたやうである。源流によるも、父青台吉の死後直に兩子の争が起つて、

忽ち滅亡を招いたやうにも取れるから、或は嫡庶の争ひが偶々濟農一家の吞併の勢に會して、小王子の東遷に伴ふ紛擾の間に滅亡を來したものともしられる。

然るに北虜世系によれば、歹顏哈（達延汗）の第七子那力不頼台吉が即ち烏巴徹察青台吉のやうで、その子孫は永く張家口外の地に榮え、之に反して博第達喇鄂特罕台吉の占領したのは北邊遙かの永謝布（永邵卜）の地だけだつたやうである。即ち那力不頼台吉の下に大様左の如くある。



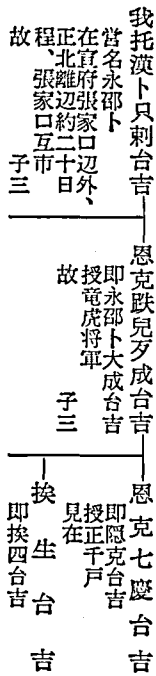


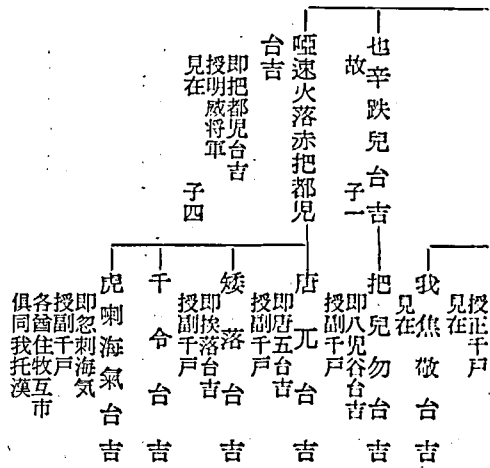
「在宣府張家口以東至獨石邊外住牧、張家口互市」といふところから見て、この那出台吉が即ち阿濟台吉で、失刺台吉が實喇台吉のことは間違ひなからう。なほ鄭文彬の籌邊纂議に載せた「歷代夷名宗派」によると、「所管部落一克委兀慎官兒」といふものを載せて、「不可台吉生一子、攪力兔台吉生四子、長子矮木蓋台吉、次子哈安台吉、三子敖八台吉、四子李兒汗度台吉」といひ、また「所管部落打喇名安官兒」といふものを書して「抹藍台吉生五子、長子把都兒台吉、次子所的蓋台吉、三子丙兔台吉、四子銀定台吉、五子赤慎把都兒台吉」といふ。譯字と順序は多少違ふが、北虜世系の末段不克台吉及び莫藍台吉と殆ど同じことを傳へて互いに出入がある。いづれにしても、これが哈連(阿速)部落の後を承けた哈不慎部落、委兀慎部落、打刺明安部落の系圖なのである。さうしてそれが染顏衛の西隣、獨石邊外にゐたことは確かである。

永邵卜即ち永謝布 (Yungshayaboo) 部の住地については、茅元儀の武備志^{卷二}鎮戍宣府の條に引いた兵略の末に「宣府鎮邊外住牧夷人」として

張家口大市廠邊外、西北接甘肅、邊外大酋永邵卜、部落四萬有餘、夷酋阿速等、部落二萬有餘、七慶把都兒、一萬有餘、俱聽哈刺慎王子白洪大調遣、不聽管束。

とあり、同^{卷二}鎮戍山西の條にはやはり兵略を引いてこれら諸酋の系圖があるが、それは全く北虜世系と同じで、且つそこには多少の省略誤字があるから、やはり北虜世系から引くと、左の如くである。





我托漢卜只刺台吉は賽那刺の第六子で、即ち博第達喇鄂特罕台吉である。恩克跌兒歹成台吉は明末の記録に著はれた有名な永郡卜大成台吉であつて、即ち前條の大酋永郡卜に當り、その子恩克七慶台吉が七慶把都兒に當り、啞速火落赤把都兒台吉も勿論阿速火落赤把都兒台吉であつて、前條の夷酋阿速に當る。因みに北虜世系に龍虎將軍といひ明威將軍といひ、或は正千戸・副千戸などといふのは隆慶五年俺答の封貢に際して、明廷より加授せられた稱號なのである。

七慶台吉のことは口北三廳志^{七卷}所引の宣鎮圖説にも現はれてゐるが、例の籌邊纂議^{一巻}一歴代夷名宗派の「順義王達子宗派」によると、「初代賽那浪罕生六子」とし、その中「二代六子我我那言住青山後正北地名十季兒太、生三子、三代長子

大臣台吉生四代影克台吉兄弟三人、三代次子合落氣台吉、三代三子獨蕪兒台吉生一子、四代把都戸台吉」と見える。賽那浪罕は即ち賽魯阿拉克汗 (Sain Alak Khan) である。その第六子の我托那言は我托漢ト只(達)刺諾顏 (Noyan) だ。その長子の大臣台吉は歹成台吉、孫の影克台吉は恩克七慶台吉である。大臣台吉の弟の合落氣台吉は恐らく歹成台吉の弟の火落赤台吉で、獨蕪兒台吉は也辛跌兒台吉で、その子の把都戸台吉は把兒戸台吉の誤であらう。こゝにも兄弟の順序を前後してゐる。

さてこの永邵ト大成台吉が俺答の姪なることは明史^{卷三}達雲傳に「永邵ト者順義王俺答從子也」と見え、また明史紀事本末^{卷六}俺答封貢の條には「俺答兄子永邵ト大成」とあり、明史^{卷三〇}西番諸衛傳には「俺答庶兄子永邵ト」とあるによつて明かである。但しこれには「俺答の兄の子」とあるけれども、俺答は賽那刺の第二子であつて、吉囊の他には兄なく、しかも永邵ト大成は第六子博第達喇鄂特罕台吉の子であるから、「俺答兄子」は恐らく「俺答弟子」の謬であらう。しかし特に斷つて「俺答庶兄子永邵ト」としたのを見ると、或は博第達喇は俺答の庶兄だつたのかも知れない。といふのは蒙古では庶出の子を正嫡の子の末に列する風があつたやうであるから、蒙古源流が博第達喇を第六子とし、明の記録が一致して六子としてゐても、俄にさう決められないからである。

とも角、博第達喇は叔父烏巴繖察の封地阿蘇特永謝布を奪つてこゝに據つた。それは源流に説く通り事實であるが、烏巴繖察(那力不頼)の裔は依然として瀋石邊外に繁榮し、博第達喇等は張家口の邊外、正北邊を離るゝこと約二十日程の所にゐたのである。阿速はまた阿蘇特・阿索特・阿蘇恣等に作られ、多く永謝布・永邵ト・應紹不と關聯して出て來る。少くともその名稱は元代の阿速衛と關係があるのであらう。永樂中に有名なる和寧王阿魯台 (Arokai) は即ち阿蘇特部の酋長であつて、その子阿里瑪丞相は瓦剌の也先が虜にした大明の正統帝を預り保護した者で、英宗がこの丞相の女摩羅

(Molo) を娶つて生せた子の朱泰薩 (Ju Taia) は後に阿蘇特の部酋になつたとの傳説がある。魏煥の皇明九邊考^{卷七}によれば、阿速は應紹不部十營中の一營名に過ぎないが、源流等の説くところでは、阿蘇特は永謝布と對立並稱すべき大部のやうである。我托那言の據つてゐる十字兒太 (Shibarai) の地は正確に分らないが、我等はこれによつて、張家口邊外の阿蘇特永謝布の地の大體を髣髴することが出来る。

三 永邵卜の全盛

永邵卜大成台吉は勢頗る強かつたやうで、隆慶六年十月吉能 (Jimong) と共に都督同知に任せられ、老把都 (Baghaur) 辛愛黃台吉 (Sengge Khungtaiji) に亞つて右翼幾十營中の四都督と稱せられたが、やがてまた龍虎將軍を加へられた。龍虎將軍は此上なき名譽の稱號である。永邵卜營は元來哈喇噴大營の一被管であつたが、大成台吉はその調遣には従つたが、管束は受けず、或は却つて哈喇噴の大酋老把都の子青把都兒をさへ凌いで、順義王そのものと同等なる待遇をも要求した。方孔炤の全邊略記^{卷二}大同略萬曆二年の條下には

時永邵卜亦晉階龍虎將軍、志驕矣、請如順義王所市數。于是、關吏辯折之曰、「青(把都兒)永(邵卜)二枝、固已相等。」永酋無辭。

と見える。

なほ新永邵卜の別部阿速及び把兒戸につきては、岷峨山人蘇志皋の譯語の中に左の如くあり、

曰把兒戸、虜中呼爲黑達子、好戰鬥、兵至數萬、以鎖鐵爲刀、曰納^平遜納不孩、亦小王子宗黨、與吉囊・俺答阿不孩
並、兵至數十萬、常據河套、與榆林・固原・寧夏諸邊相望。

納遜納不孩とは聊か不明だが、恐らく阿速阿不孩の訛音であつて、例の阿速火落赤把都兒でも指したのであらう。火落赤把都兒の本部が阿速の故土だつたのはその名前から見ても疑ないところである。火落赤把都兒が察哈爾の圖們汗の右翼三執政理事の一人「阿蘇特之諾木達喇古拉齊諾延(Nomdara-Khulachi-Noyan)」に外ならぬことは既に述べたところである。

把兒戸の名はバイカル湖に注ぐ Barguzin 河附近から起つたことに間違ないが、今の呼倫貝爾地方にゐる巴爾呼(巴爾虎)部もこゝから移つたものである。明代の把兒戸もこれと何等か關係があらう。蒙古源流には巴勒噶沁(Bargazin)と書かれ、應紹不部十營の一としては叭兒販として著はれてゐる。黑達子の把兒戸は永邵卜大成台吉の弟、阿速火落赤把都兒の兄、也辛跌兒台吉の部落名であらう。把爾戸の名は明史^{卷三}鄭洛傳に二たび現はれ、俺答に従つて西海(青海)に移り、こゝに駐住したる酋首に永邵卜の別部把爾戸及び丙兒・火落赤等があるといふ。把爾戸が把兒戸と同音の異譯なるは論がない。前掲の北虜世系及び兵略の系圖によれば、也辛跌兒台吉の子に把兒勿即ち八兒谷がある。この把兒勿が直に鄭洛傳に見えた把爾戸であるのは明かであるが、たゞ譯語の記述に見えた把兒戸はこれより稍々年代が上るやうである。思ふに把兒戸とは永邵卜・阿速等と同じく、本來部落名であつて酋名ではない。恐らく酋名としては代々の通稱であつたであらうから、把兒勿の父也辛跌兒を以つて、即ち譯語の把兒戸だらうと推定する。蒙古源流^{卷六}には萬曆五年歲次丁丑阿勒坦汗が達賴喇嘛を迎へた時の第一次迎接使の隨一に「永謝布之巴爾郭岱青(Bargo Daiching der Djungshyābo)」と數へてゐる。永謝布之巴爾郭岱青は勿論永邵卜別部の把兒勿台吉であらう。鄭洛傳によれば、その後把爾戸は明軍・番人(西藏人)に夾撃せられて西寧に大敗したといふ。把兒戸の部落を一に黑達子といふのは必ず近所の察罕塔々爾(白達子)に對應する名稱だらうが、その故を詳にしない。或は全邊略記^{卷二}大同略の中に哈喇慎の青把都兒が隙を伺つて、その

廬を奪つて去つたと見えた「迤北黑夷」も之を指したものかも知れない。

いづれにもせよ、阿速・把兒戸は譯語にも見えたる如く、内蒙古西北遊の部落であつて、永邵卜の本部も明邊に甚だ遠かつたことは大清一統志^{卷四〇}に俺答全盛時の境域を説いて

開拓疆土、南至大同山西邊、北至永邵卜、東至喀喇沁、西至鄂爾多斯。

とあり、また萬曆五年九月明の宣大總督方逢時の陳虜情以永大計疏に、大同邊外の虜酋を擧げて、

俺答老矣、黃台吉亦衰病不支。套虜遠在西鎮、切慶黃台吉頗稱恭順。兀慎・擺腰人寡力弱。永邵卜遠去邊鄙。惟青把都兄弟五人、各擁千兵。

といへるによつて明白である。蓋し故の永謝布萬戸は直に宣大邊外の地に連つてゐたが、哈喇慎營興り、哈連營衰へたる後は、この萬戸の南邊の地は老把都の一族及び辛愛黃台吉の類の據る所となり、新永邵卜の諸部は勢その北邊に退かざるを得なかつたのである。口北三廳志^{卷七}所引の宣鎮圖説の所述は専ら明邊を距る數百里内なる諸酋につきてのみ記してゐるが、たゞその最後に唯一の例外を示して左の如く傳へてゐる。

邊外遠野駐酋首穆克等、部彛約九千餘騎、在邊迤西名不喇母林・吾力良一帶駐牧、離邊約一千三百餘里。尙忽台吉等部彛約八千餘騎、在邊迤西地不喇母林・吾力良一帶駐牧。把兒台吉等部彛約五千餘騎、在邊迤西哈喇我包一帶駐牧、離邊二千餘里。

不喇母林・吾力良・哈喇我包等の地は凡べて審かでないが、不喇母林は或は下喇母林的誤ではないか。下喇母林(錫拉木倫)なら今百靈廟の東北を北に流れる河川である。この邊に住んでゐたのであらう。その酋名も穆克(Warko)、尙忽(Tang-hu)及び把兒(Par-eh)台吉は即ち永邵卜大成の子恩克(En-ko)、阿速火落赤把都兒の子唐兀(Tang-wu)及

び也辛跌兒の子の把兒勿 (Pa-erh-i-wu) 台吉である。哈喇我包 (Kara Obo) と云ふのは黒いオボと云ふことであるから、或は把兒勿の部落が黒達子といはれたのはそれに基づくかも知れない。勿論強盛なる永邵卜の諸酋は自ら南邊の興和附近に來りしこともあり、その一族は常に張家口大市廠に往來したけれども、しかもこの大體より言ひて、遠く西鄙に退きたる位置は彼等をしてやがて甘肅邊外に走らしめたものと見える。

前掲兵略の文に永邵卜の本據を説いて「張家口大市廠邊外、西北接甘肅」といつた下一句は頗る不可解であるが、實はこれは永邵卜の諸酋が絶えず甘肅邊外の地に往反せしより起れる誤解である。武備志^{卷二}八^三鎮皮甘肅の條に引いた兵略に曰く、

甘鎮邊外住牧夷人、西海離邊三五百里不等、盤住夷人、酋首永邵卜乞慶黃台吉等、部落二萬有餘、住牧甘鎮邊外、在於宣府張家口互市領賞。

乞慶黃台吉とは即ち七慶把都兒である。永邵卜大成台吉が自ら貢市宣府にあり、守臣の己を遇すること厚く、侵寇を逞しうすべからざるを以つて、俺答の西して活佛を迎ふるに従ひ、遂に青海に留據したことは明史^{卷二}三九^二達雲傳の能く傳ふところである。初め青海の北虜は俺答のト兒孩征伐によつて開かれたが、俺答の第四子丙兔台吉がこゝに駐住するに及び、河套諸部の酋首にも、切盡黃台吉等來牧する者が甚だ多く、萬曆六年の頃には全く西番諸族を屈服して、この地は迎佛の中心地、北虜繁昌の新領土となつた。俺答は翌七年八月歸化城に東歸したが、その従子永邵卜・火落赤等は兩兒と共に久駐して去らず、頻りにこゝに根據を固めた。既にして俺答死し、辛愛黃台吉逝き、順義王は第三代捲力克に至り、統制漸く弛廢するや、西海は動搖を來した。況して萬曆十五六年の交、青海の丙兔、河套の切盡黃台吉相ついで死するや、十六年九月永邵卜等は、大舉して西寧に入り、明の副總兵李奎を殺し¹⁾、丙兔の子眞廂は莽刺川に移り、永邵卜の弟火落赤は埏

工川に遷り、西寧に逼近して日に蕃族を蠶食した。然るに順義王擻力克は之を制止せざるのみならず、親ら赴いて火落赤等を援助したから、西海の虜勢は大いに振つて、萬曆十八年中明の邊將の陣歿するもの相尋ぎ、諸番は皆屈して北虜の手足となつた。その後或は尙書鄧洛の智略、もしくは總兵尤繼先等の勇戦によつて、虜勢やゝ怠ることもあつたが、火落赤及び眞廂の跳梁は止まず、火・眞といへば、遼東の挿漢兒土蠻に亞いで、明末の最も邊患とするところであつた。

兵略によれば、その他西海の諸酋には河套の切盡黃台吉の姪鐵雷及び松山の敗酋資鬼の子那木大等が著はれてゐるが、俱に弱小にして數ふるに足らず、青海隨一の大酋として清初にまで盛んだつたのは、永邵卜七慶把都兒であつたこと、明史韃靼傳の末尾に挿漢兒の林丹汗が既に哈喇慎・土默特を吞滅した後、之に對抗すべき強酋は唯一の永邵卜のみなることを云ひ「永邵卜最強、約三十萬人」と誇稱せられたので推測出来る。しかもこの永邵卜部の衆も案外脆弱であつて、林丹汗の西遷に會ふや、本土は忽ち蹂躪の中心となり、西海の殘部もやがて額魯特・西藏の發展に會して、滅亡して了つたやうである。

四 哈 喇 慎 部

哈喇慎の名は恐らく元の時の哈刺赤から出たらうが、⁽²⁾明代に入つて最初に現はれたのは瓦剌の順寧王脫歡の時からである。葉向高の四夷考⁽³⁾北虜考によれば、脱歡が競敵和寧王阿魯台を滅ぼして、塞北の統一をほゞ遂げたことを記して曰く、

是時、脱歡強、稍併有賢義・安樂⁽⁴⁾之衆。急擊殺阿魯台、悉收其部落、欲自立爲可汗、衆不可。乃行求元後脱
 々不花王爲主、以阿魯台衆歸之、居漠北。哈喇慎等部俱服屬焉。

時に宣徳末年のことである。本文の意味はやゝ曖昧であつて、哈喇噶等は或は漠北の部落のやうにも取れるけれども、實はさうではなく、脱歡の威力が強大であつて、漠の南北を蔽つたから、その身は漠北にありながら、漠南の哈喇噶等の部が皆服屬したといふことであらう。哈喇噶部が大部であつたことは推察出来る。

次に喀喇沁部の出で来るのは大酋孛來の屬部としてである。明の景泰中、瓦剌可汗の也先が部下の阿剌知院に弑された時、起つて阿剌知院を撃ち滅ぼし、脱々不花汗の遺兒麻兒可兒を求めて可汗とし、始めて小王子としたのは韃靼部長孛來である。⁽³⁾その後成化の初め毛里孩の手に斃れるまで、孛來は韃靼部中に威を振つた。この孛來を蒙古源流^五には「喀喇沁蒙古之博賚太師」とあるのである。

けれどもこの喀喇沁がどこにあつたかは審かでない。後の喀喇沁部が確に現はれたのは、達延汗の統一の後、右翼濟農の巴爾斯博羅特がその第四子巴雅思哈勒昆都楞汗にこの地を佔據せしめた時にある。蒙古源流^六に
巴雅斯哈勒庚午年生、佔據永謝布之七鄂托克喀喇沁而居。

とある。この喀喇沁が明人の所謂哈喇噶のことは、鄭曉の皇明北虜考に

南有哈喇噶・哈連二部、哈喇噶部營一、酋把答罕奈、衆可三萬。哈連部營一、酋失刺台吉、衆可二萬、居宜府大同塞外。

にあるので明かである。その哈連部が哈速部即ち阿速部の誤りで、その酋失刺台吉のことも既に説いた。譯語に或は「曰阿刺噶、曰莽觀鎮、兵各二三萬、常在宜府邊外住牧、云是分地也、牛車多於馬駝、不時爲患、若大學入寇、必糾套虜以恣猖狂」とある阿刺噶もこれであらう。哈喇噶部の把答罕奈が巴雅斯哈勒即ち把都汗のことを次に説かう。哈喇噶部の系圖は籌邊纂議^一順義王達子宗派や康熙宣化縣志^七一武略志等にも見えるが、いずれも粗略である。北虜世系はこれらに比

べれば詳しいけれども、なほ遺漏が多い。やはり武備志^{卷五}鎮戍宜府の條に引いた兵略に若くものはない。今兵略によつて之を記し、他の記録で補ふことにする。兵略には左の如くある。

宣府鎮邊外住牧夷人。哈喇慎是營名、與獨石相對、離獨石邊三百餘里、在舊開平住牧、張家口互市。崑都崙哈生五子、長子黃把都兒故、生四子。二子青把都兒故、生六子。三子哈不慎故、生六子。四子滿五素存、生十一子。五子馬五大故、生二子。

黃把都兒故、部落約一萬五千有餘、生四子。

長子白洪大、即崑都崙哈、哈即王子也、存、總掌管哈喇慎達子。生三子、長子打利台吉存、二子蠻地台吉存、三子抄什麻台吉存。

二子擺獨賴故、生二子、長子刀兒計台吉故、二子慙不什台吉存。

三子擦汗我不根故、絕嗣。

四子我不根、又名丙兔朝庫兒台吉、存。

青把都兒故、部落約二萬有餘、生六子。

長子來賽台吉存、生二子、長子不答什台吉存、二子施令台吉存。

二子啞拜台吉存、生二子、長子朝麥兔台吉存、二子不刺兔台吉存。

三子來洪達賴台吉存、生二子、沙木顏台吉存。

四子擺洪達賴台吉故、生一子、桑兒在台吉存。

五子石令台吉存。

六子我滔台吉存。

哈不慎故、部落約一萬有餘、生六子。

長子小歹成台吉故。

二子脫可台吉存。

三子歹安兒台吉存。

四子矮鴉兔台吉故。

五子迭可兔台吉存。

六子洮兒計台吉存。

滿五素存、部落約一萬有餘、生十一子。

長子史的貴台吉存。

二子滿根兒台吉故。

三子不喇兔台吉存。

四子擺哈兒台吉故。

五子塞令台吉故。

六子脫計台吉故。

七子本不什台吉存。

八子習喇我不根台吉存、啞音。

九子島兒計台吉存。

十子班莫台吉存。

十一子陞不世台吉存。

馬五大故、部落約一萬有餘、生二子。

長子班不什台吉故。

二子白言台吉存、生二子、長子加兒木台吉存、二子不列世台吉存。

臨邊住牧、章兔倫不浪等、部落約一千有餘。

章兔倫不浪、恩的個倫不浪、歹青倫不浪、歹都倫不浪、白洪大倫不浪、伯彥倫不浪。

最後の倫不浪 (Tahung) は婿の義である。これは哈喇慎部の婿をいつたのであつて、その中には朶顔の酋首などもゐたことであらう。さて最初に歸り、霧邊纂議には老把都の住地を「住獨石後三間房」とあるが、三間房は舊開平に近いところにあつたのであらう。北虜世系には之を「老把都兒台吉、即昆都力哈、初欵授都督同知、在宣府張家口東北、至獨石開平一帶住牧、張家口互市」といひ、その五子を列ねてゐるが、「擺三勿兒威正台吉、即黃把都兒故、子四」、「崑都崙歹成台吉即青把都兒、授金吾將軍、故、子五」、「哈不慎台吉、授指揮僉事、故、子六」、「矮兒克勿打兒汗台吉、即滿五索、授指揮僉事、子七」、「七慶朝庫兒台吉、即滿五大、妻速麥比妓、子一」とあつて、著しき異名を擧げてゐる。子の數も概して少ないが、世系の最も劣つてゐるのは、その子の代までに限り、孫の代を一切傳へぬことである。

なほ口北三廳志^{卷七}所引の宣鎮圖説によれば、

口外哈喇慎爲部中大酋、高祖阿喇哈、會祖昆都崙、稱韃靼王子、故、祖黃把都兒承襲、故、父白洪大承襲、故、今長

子打利台吉承襲、亦部中王子、統屬節流枝派三十餘枝、共約部夷數十萬有餘、強弱相半、俱在獨石口邊外地名舊開平等處駐牧、離邊二三百里不等。其馬營赤城邊外地、名補喇素泰、爲汪阿兒害駐牧。

とあり、高祖阿喇哈は高祖賽音阿拉克、曾祖昆都崙は曾祖巴雅思哈勒昆都楞である。宣化縣志^{七一}には之を「順義王名俺答、係元裔小王子洒阿汗之第三子」などとあるけれども、洒阿汗は賽那浪罕即ち賽音阿拉克汗の別譯であらう。但し高祖賽音阿拉克は必ずしも舊開平に來住した始祖ではなく、曾祖昆都楞汗こそ最初に移住し、汗號を稱したその始祖であらう。また昆都楞汗の號は個人名にあらずして、その家に世襲の汗號だつたのであらう。といふのは「哈即王子也」であつて、「稱韃靼王子」といひ、「亦部中王子」といつたのは、代々汗號を世襲したことを示し、兵略に祖老把都兒をも崑都崙哈と呼び、孫白洪大をも崑都崙哈としたのは正にこの事を立證してゐる。なほ口北三廳志には哈喇慎の馬營の地補喇素泰に注して、「即西爾哈蘇台、統志克西克騰有高柳谷、蒙古名伊克布爾哈蘇台、又西南十五里、有巴淡布爾哈蘇台、案蒙語布爾哈蘇柳也」とあり、恐らく正しいであらう。

老把都の勢力は初めより兩兄吉囊・俺答と雁行してゐたものと見え、嘉靖二十年九月早くも兩兄と共にその首に爵都督・賞千金を懸けられたことを以つて著はれてゐる。⁽⁵⁾されば老把都が賽那刺の子より移つて哈喇慎に住したのもこの年を距ることや、近き頃であらう。同二十五、六年の頃には既に俺答侵寇の左翼を爲し、保只(博迪汗)・俺答及び吉能と共に當時蒙古の四大頭目として數へられたといふ。⁽⁶⁾世宗實錄嘉靖三十年五月の條には彼を俺答の親枝五部の一に數へてゐるが、強盛なる昆都力哈は寧ろ俺答の屬下ではなく、忠實なる同盟の一部だつたのである。明史^{卷三}王崇古傳に

吉囊子吉能據河套、爲西陲諸部長。別部賽兔駐牧大小松山、……自河套以東、宣府大同邊外、吉囊弟俺答・昆都力駐牧地也。又東衛昌以北、吉囊・俺答主土蠻居之。皆強盛。

といひ、俺答・昆都力兩者を同等に併記したのは最もよくこの實情に適つて居る。

嘗つて隆慶五年俺答が明の冊封を受けて順義王となるや、老把都は王の嫡子辛愛黃台吉と共に唯だ二人の都督同知に任ぜられたが、なほ足れりとせず、兄順義王と同じき王號を望んだといふ。老把都は間もなく病没して志を遂げなかつたが、ここになほ四大頭目が互に相下らなかつた狀を示す話がある。それは俺答が順義王となるや、老把都も同時に封王を望んだが、俺答の主土蠻汗もまた直に遼薊に薄つて封王を求め、吉能はその時には別に要求しなかつたが、後になり、その孫吉能は俺答の玄孫ト失兔の順義王襲封を例として封王を通るに至つたといふことである。老把都は明の封冊こそ得なかつたが、また自ら蒙古の汗號を稱したのである。可汗の號は後に喇嘛教輸入の以後にこそ之を授けられる者が多きに至つたが、それより前には可汗といへば即ち元室の嫡統を意味し、達賚遜汗の時阿勒坦が請うて索多汗の稱號を得たのでさへ、源流に特筆して異數とするところであつた。然るに老把都は夙に汗號を稱し、阿勒坦汗と並んで昆都楞汗の名は隨所に著はれてゐる。老把都の強盛はかくの如くであつたけれども、その人物は却つて寛厚なる長者であつたやうで、俺答が曩きに兄吉囊を扶けた例に従ひ、よくその兄俺答を扶翼したばかりでなく、俺答とは寧ろ不和であつた兇悍なる辛愛黃台吉や故主小王子土蠻汗とも頗る親和し交歡したやうである。けれどもその部落の益々繁盛するに反して、順義王の威力が次第に傾くと、老把都の兇孫は先きに俺答が吉能を壓倒したが如く、順義王部を離れて漸く獨立の姿になつた。兵略によれば、老把都には五子二十九孫十三會孫あり、部衆も總計七萬に垂んとしたといふ。その諸子諸孫が皆颯強にして勢威を振つたことは明史吳免傳・李成梁傳等に著しいところである。蓋し宜府口北道の邊外は最も形勝の地を占めて、水草豐美の沃土であつたから、こゝに據つた哈喇慎はやがて往時の應紹不（永謝布部）の全盛を恢復したものであらう。

かくして第一に可汗、第二に可汗を離れた右翼濟農、第三に濟農を壓倒した順義王、第四に順義王を離れた崑都楞汗、

この四者の獨立は漠南內蒙古の中心を逐次増加して四個にならしめた。この形勢は既に所謂四大頭目の對立に萌芽し、前掲王崇古傳の文面にも著はれてゐたが、清朝實錄六卷天命五年正月清の太祖が蒙古の林丹汗に與へたる書中に一層明白である。曰く、

且此六萬人之衆、又不盡屬於爾、屬鄂爾多斯者萬人、屬十二土默特者萬人、屬阿蘇志・雍謝布・喀喇沁者萬人、則此三萬之衆、又各有所主也、於爾何與哉、即此三萬之衆、亦豈盡爲爾有、以不足三萬人之國、乃遠引陳言驕語、爲四十萬、云々。

乃ち可汗の率ゐる左翼三萬戸に背きたる右翼の三萬戸はまた各々分離獨立したのである。

老把都及び其の子青把都等が如何に朶顏の地に勢力を伸ばし、遼筋の邊を脅かしたかは嘗て述べた。康熙宣化縣志七卷一武略志には萬曆四十一年秋の條に「白洪大台吉擁兵臨塞、要挾歲增、督臣撫臣指陳利害、乃解去」と記し、注して左の如く曰つて居る。

先是、青把都要挾歲增、凡三與之。至是、白洪(大)馳精騎八千、藉前爲口實。將吏洶々、以爲與之便。總督余宗濬・巡撫王道亨謝勿許、且指陳利害、乃解去。按白洪大台吉乃老把都之長孫、黃把都之長子、……青把都乃老把都之二子、即昆都俞台吉、生六子、長曰木洪來大。自此以後、迄天啓中、卜石兔借互市、嘖有煩言、而邊臣不敢許。至五年、在大同邊外講市。朗素在山海關外講市。時救木台吉・毛吉炭台吉亦以市故、嘖有煩言。案救木與毛吉炭駐牧宜府東路四海冶、下北路滴水崖邊外、皆三封順義王捨力良次子阿洪(弟安兔)之子、其長子曰七慶。朗素係哈喇慎部落、乃長昂台吉之子、貴英亦彼中頭目、亦住喜峰口外。

下の數句は哈喇慎といつても、實はその屬部の朶顏衛のことであり、救木(布)と毛吉炭とは後の東土默特都、兀愛營の

ことである。これらのことは既に前に述べた。⁽¹¹⁾その他明の天啓中、清朝の興起に當つて、班不什台吉・白言台吉等が進んで遼西方面に活躍したこと、及び哈喇慎部が遂に西遷の察哈爾部と戰つて、潰滅の悲運に陥つたことも既述の通りである。⁽¹²⁾

五 俺答哈の子孫

魏煥の皇明九邊考^{卷六}三關鎮の邊夷考にはまた左の如くある。

北虜亦克罕一部、常住牧此邊、兵約五萬。爲營者五、曰好城察罕兒、曰克失旦、曰卜爾報東營、曰阿兒西營、曰把郎阿兒。入寇無常。近年虜在套中、以三關爲出入之路、直抵山西地方搶掠。嘉靖十九年秋、虜酋吉囊擁衆數萬、由偏頭等關、入寇太原、大掠居民而出、零賊亦爲鄉兵所殲。二十年秋、前虜復由本關入、直抵平定州、參將某甲被害、居民殺虜者無數、山西自來被遼虜之慘、未有過于此矣。

この前半はまた鄭曉の皇明北虜考に纏めてあるので、既に精査を経た。⁽¹³⁾たとゝ源流によるに、巴爾斯博羅特の第五子巴延達喇納琳台吉は「佔據察哈爾之察罕塔々爾而居」とあるから、察罕塔塔爾はこの察哈爾の中に含まれたと思はれるが、その地がどの邊であつたかは審かでない。巴延達喇は籌邊纂議の順義王達子宗派や北虜風俗附北虜世系に見える賽那浪罕(賽那刺)の第五子那林台吉に相違ないが、その住地は籌邊纂議には「住獨石正北地名我力速太」とあり、北虜世系には「在宣府獨石邊外正北住牧、離邊十五、六日之程、張家口互市」とある。那林台吉子孫の系圖は餘り煩雜になるから、こゝには省略するが、明史^{卷三}李成梁傳には、萬曆十八年二月「卜言台周・黃台吉・大小委正結西部又漢塔塔兒、五萬餘騎深入遼瀋海蓋、云々」とも見えてゐる。西部の又漢塔々兒とは即ちこの察罕塔々爾であらう。

九邊考^七榆林鎮の邊夷考にはまた

河套東西長一千八百里、南北中長一千餘里、左右減半。榆林外套、皆漢朔方郡、秦取匈奴河南地即此。成化七年、虜始入套、搶掠即出、不敢住牧。弘治十三年、虜酋火篩大舉入套、始住牧。正德以後、應紹不・阿兒禿斯・滿官嗔三部入套。應紹不部下爲營者十、曰阿速、曰阿喇嗔、曰舍奴郎、曰孛來、曰當喇兒罕、曰失保嗔、曰叭兒厥、曰荒花旦、曰奴母嗔、曰塔不乃麻。舊屬太師亦不剌、後分散、各部惟哈麻真一部全。阿兒禿斯部下爲營者七、舊亦屬亦不剌、今則大酋吉囊領之、爲營者四、曰啞合斯、曰偶甚、曰叭哈思納、曰打郎。滿官嗔部下爲營者八、舊屬火篩、今則大酋俺答阿不孩領之、爲營者六、曰多羅土悶、曰畏吾兒、曰兀甚、曰叭要、曰兀魯、曰土吉喇。三部兵約共七萬、俱住牧套內、時寇綏寧甘固宜大等邊。

とある。これも皇明北虜考に掲げてあるから、前に觸れた⁽¹⁴⁾。殊にこの記事は之を悉く河套内としたことには誤解があるやうである。今こゝに俺答の屬部だけを考へて見よう。

俺答は吉囊の弟で、最も活躍した人であるから、本篇もその覇業を中心にして考察するのであるが、先づその系譜から考へて見よう。俺答の系譜は色々のものに見えてゐるが、康熙宣化縣志^七一武略志のいふところは前の記録を雜引したものであり、王鳴鶴の登壇必究^三二北虜各支宗派は鄭文彬の籌邊纂議^一の順義王達子宗派と全然同一であるが、大分簡略である。王士琦の三雲籌組考^二封貢考に載するところは殆ど蕭大亨の北虜風俗に附した北虜世系と同様であるが、多少の増補があり、武備志所引の兵略とも相補ふところがあるから、今は専ら三雲籌組考により、北虜世系及び兵略を參考して左の表を作る。

俺 答 哈

隆慶五年受封順
義王、万曆九年
卒
在大同边外大
青山昭君墓登
州離住牧、西
至河套、東至
宣府洗馬林一
帶、離边三百
余里
子九

與 克 都 隆 哈

即黃台吉
万曆十一年襲封
順義王、十三年
卒
先在宣府边外
旧興和所小白
海馬肺山一帶
住牧、離边三
百里、襲封後
仍住俺答旧穴
子十四

拈 力 克 哈

万曆十五年襲封
順義王
先在山西偏關
外胡地委兀兒
趁一帶住牧、
襲封後仍住俺
答旧穴、水泉
得勝二处互市
子七

晁 见 台 吉

授電虎將軍
在委兀兒趁一
帶住牧、離边
約七百余里
子三
故

石 见 黃 台 吉

即掣刺克炭台吉
授電虎將軍、晁
见早故、卜魯
居西海、攬力克
故、五路台吉迎
婦襲封、見在哈
套察汗敖刺住牧
子一

羅 戶 台 吉

把 都 慢 黃 台 吉

他 兒 泥 台 吉

俱 授 指 揮 僉 事
隨 卜 石 兔 住 牧

五 十 萬 打 力 台 吉

即毛明暗台吉
在大同新平边
外住牧
子二
次子尚幼

五 班 南 台 吉

隨 卜 石 兔 住 牧

明 暗 台 吉

滿官正比妓所出
住新開口、卜魯
未封、明安代理
共事、諸部多服
子二

察 汗 我 不 良 台 吉

打 兒 泥 台 吉

俱 隨 毛 明 暗 住 牧

士麥台吉——士麥大兒台吉

子三
次子尚幼

耳章速台吉

二酋俱在委兀兒
趁住牧

我兒谷道台吉

革立猛克台吉

子一尚幼

授百戶

隨下石兔住牧

以上各酋俱在新

平市口互市

五路黃台吉——敖卜言台吉

授副千戶

五路故，代領其

衆，頗知恭順，

在伊父原巢住牧

轟庫台吉

授百戶 見在

虎喇哈氣台吉

授副千戶 見在

勿同台吉

授百戶 見在

以上三酋均敖卜

言一同住牧

即那木兒台吉
先授指揮僉事、
後隨韋虎將軍、
在大同天城、正
北五克兒菊兒克
一帶住牧、離邊
五百余里、卜酋
婚封、本酋頗効
勞力、新平市口
互市 子四

青把都兒補兒哈
見台吉
歹成朝庫兒台吉 (兵兔台吉)

宰生台吉 (金兔台吉)

授指揮僉事
住牧互市与五路
台吉相同
王都兒台吉 (他兒拜台吉)

山羔兒台吉 (班々石台吉)

大刀兒計台吉 (刀兒計台吉)

小刀兒計台吉 (把汗彫兒計台吉)

公布台吉 (歸登台吉)

以上諸酋俱在新平
塞外住牧、随五路部
落以奉款約

哈木把都兒台吉

授指揮僉事
在山西偏關西北
辺外擦哈把刺哈
素住牧、離辺一
百六七十里、新
平市口互市
見在

松木兒台吉

授指揮僉事
在宣府下西路正
北辺外擦哈孛兒
住牧、離辺約二
百余里、新平互

的力蓋兒台吉

授副千戶 見在

跌力波兒台吉

授副千戶 見在

市、極窮為盜、
即開市之虞亦多
苦之、名其部曰

賊達子
子四

葛勒兒台吉
授百戶
見在

虎督度
即小活仏、万曆
二十年題降梁兒
只唱、年可五六
歲、蓋西方僧之
前身也

假奈台吉

即波兒哈都台吉
授指揮僉事
在宣府膳房堡迤
北馬肺山一帶住
牧、離辺二百余
里、新平互市
故絶

打賴宰生台吉
即我摺進台吉
住牧互市与段奈
同、本酋忽懸、
卜酉封貢、極為
効順

子一
主兒麻大台吉
隨父宰生住牧

台石台吉

即台失哈不害
授指揮僉事

安兔台吉

以下各台吉俱在
宜鎮電門所辺外
故一帶地方住牧
三子

圪他汗台吉

完布台吉

巴賴台吉

不彥台吉
 即擺腰台吉
 在大同陽和邊外
 西北一克菊力革
 住牧、離邊三百
 余里、陽和守口
 堡互市
 子一

朝 兔 台 吉
 故 三子
 土列哈兔台吉
 土力把兔台吉
 擺言兔台吉
 故絕
 明 暗 台 吉
 授副千戶

擺腰把都兒台吉
 授指揮同知
 子六

召兒必太台吉
 瓦紅大台吉
 索那台吉

松木兒台吉
 授百戶、擺腰故
 代領其衆

明 暗 台 吉
 授副千戶
 同 門 台 吉
 即土門台吉
 授副千戶

兀 上 台 吉
 即兀尚噶不害
 授百戶

刺 麻 台 吉
 爲僧

五十拜台吉
 以上各酋俱同不
 彥台吉住牧
 俱見在

鐵背台吉
子一 把漢那吉
冷克木台吉
猛克台吉

授指揮使、後
先授指揮使、後
授昭勇將軍
其父早故、隨育

不速布台吉

二酋俱隨把汗比
之幕、忠義與子

城、地方分為東
西哨、猛克隨住

是也

故絕

于西哨之地

兀即大板升迤西

是也

故絕

于西哨之地

故絕

于西哨之地

故絕

于西哨之地

故絕

于西哨之地

故絕

于西哨之地

故絕

于西哨之地

故絕

于西哨之地

故絕

把漢那吉

即大成台吉

幼喪父、育于祖

母一克哈屯、因

與祖俺答有隙、

偕妻把汗比妓投

降中國、貢市之

端由此奮起、在

山西偏關外西

北哈朗兀住牧、

離邊三百余里、

大同得勝、山西

水泉二處互市、

萬曆十四年墜馬

而死

子二

子一

子一

子一

子一

子一

子一

子一

子一

子一

鐵背台吉

子一

子一

子一

子一

子一

子一

子一

子一

子一

子一

子一

子一

子一

子一

子一

子一

子一

子一

子一

子一

子一

子一

子一

子一

把漢那吉

即大成台吉

幼喪父、育于祖

母一克哈屯、因

與祖俺答有隙、

偕妻把汗比妓投

降中國、貢市之

端由此奮起、在

山西偏關外西

北哈朗兀住牧、

離邊三百余里、

大同得勝、山西

水泉二處互市、

萬曆十四年墜馬

而死

子二

子一

子一

子一

子一

子一

子一

子一

子一

子一

冷克木台吉

授昭勇將軍

其父早故、隨育

于祖母把汗比

妓、即忠義夫人

之幕、忠義與子

素囊住于輝化

城、地方分為東

西哨、猛克隨住

于西哨之地

故絕

于西哨之地

故絕

于西哨之地

故絕

于西哨之地

故絕

于西哨之地

故絕

于西哨之地

故絕

于西哨之地

故絕

于西哨之地

故絕

猛克台吉

授指揮僉事

其父早故、隨育

于祖母把汗比

妓、即忠義夫人

之幕、忠義與子

素囊住于輝化

城、地方分為東

西哨、猛克隨住

于西哨之地

故絕

于西哨之地

故絕

于西哨之地

故絕

于西哨之地

故絕

于西哨之地

故絕

于西哨之地

故絕

于西哨之地

故絕

于西哨之地

故絕

丙兔台吉

授指揮同知

嘗名威武慎、在

陝西河州西海住

牧、甘肅扁渡口

互市

故

子三

子一

子一

子一

子一

子一

把漢那吉

即大成台吉

幼喪父、育于祖

母一克哈屯、因

與祖俺答有隙、

偕妻把汗比妓投

降中國、貢市之

端由此奮起、在

山西偏關外西

北哈朗兀住牧、

離邊三百余里、

大同得勝、山西

水泉二處互市、

萬曆十四年墜馬

而死

子二

子一

子一

子一

子一

子一

子一

子一

子一

子一

冷克木台吉

授昭勇將軍

其父早故、隨育

于祖母把汗比

妓、即忠義夫人

之幕、忠義與子

素囊住于輝化

城、地方分為東

西哨、猛克隨住

于西哨之地

故絕

于西哨之地

故絕

于西哨之地

故絕

于西哨之地

故絕

于西哨之地

故絕

于西哨之地

故絕

于西哨之地

故絕

于西哨之地

故絕

猛克台吉

授指揮僉事

其父早故、隨育

于祖母把汗比

妓、即忠義夫人

之幕、忠義與子

素囊住于輝化

城、地方分為東

西哨、猛克隨住

于西哨之地

故絕

于西哨之地

故絕

于西哨之地

故絕

于西哨之地

故絕

于西哨之地

故絕

于西哨之地

故絕

于西哨之地

故絕

于西哨之地

故絕

把林台吉
授指揮同知
納賴台吉
即納屍委台吉

在大同陽和正北

山後歹顏那失機

住牧、離邊五百

里、陽和守口互

故市

授百戶

補兒哈兔台吉

即補兒哈都台吉

授副千戶

姐 女 台吉

即且且台吉

授副千戶

土麥 台吉

授百戶

著力兔 台吉

即著力兒把獨兒

台吉

授指揮同知

廷定 台吉

挨克 台吉

以上七酋俱隨

丙兔海上住牧、

惟土委台吉于大

同守口隨貢開市

哥力各 台吉

在大同得勝堡邊

外察爾我肯山後

住牧、離邊三百

里、得勝堡互市

故 子一

打賴阿拜 台吉

即那那 台吉

授指揮僉事

故 子四

班慢 台吉

即班兒慢 台吉

授指揮僉事

見在 子一

班的思克 台吉

見在

也林金 台吉

不他失禮黃台吉

先授指揮同知

後陞驃騎將軍

又陞都督僉事

在大同殺胡辺外

豐州灘山後可兒

兔一帶住牧、山

西水泉大同得勝

二処互市、三娘

子所生、兵馬地

土極為富強

子二

沙赤星台吉

三娘子所生

先授副千戶、後

陞明威將軍

故絶

倚兒將遜台吉

三娘子所生

授百戶

故絶

啞不害台吉

早故

素囊黃台吉

把漢比妓所出、

先是、把漢那吉

故、遣把漢比

妓、為不他失禮

所收、生素囊、

藉其祖母忠順夫

人之勢、併有板

升之衆、極稱富

強、与卜魯構

聲、其母把漢比

妓感投順時、不

殺之恩、頗効恭

順、故卜魯受封

時、題封把漢比

妓、為忠義夫

人、素囊為都督

同知、以示優厚

子一

打賴台吉

山阿兒架台吉

俱見在

以上諸酋部真不

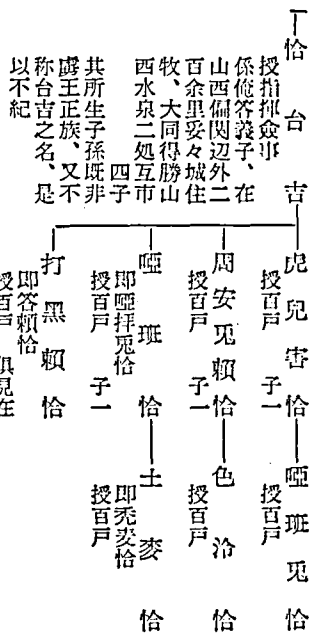
滿千數、俱隨素

囊東哨住牧、殺

胡堡案外

習令台吉

尚幼、隨素囊住



安兔台吉・朝兔台吉の子供、及び恰台吉の子孫は記して無かつたが、兵略及び北虜世系によつて補つた。青把都兒補兒哈兔台吉の子供は餘り名が違ふので、北虜世系及び兵略によつて異名を括弧内に補つた。その他少々の相違は態と註しなかつた。たゞ素囊黃台吉のことは、兵略に「不他失里黃台吉、係順義王俺答第七子、三娘子所生也、生二子、長子啞不害台吉、即溫布、又名素囊、二子公赤兒啞不害台吉」とあり、北虜世系にも長子「啞不害台吉」と次子「公赤兒啞不害台吉」を載せるのみで、「啞不害台吉、早故」はない。この方がよいのではないかと思ふが、姑く釋組考に従つた。また興克都隆哈即ち黃台吉の第七子打賴台吉及びその子主兒龜大台吉については、兵略に「三娘子係故虜王扯力克繼母、存、生二子、長子打賴台吉存、二子嘴兒窰台吉存」とあり、同一事を指したに相違ないが、彼には父子とあり、これには兄弟としてゐる。三娘子は始め俺答に嫁し、俺答の死後、またその子黃台吉の妻となつたのであるから、不他失里は最初の夫の子で、打賴台吉の二度目の夫の子なのであらう。それは能く解るが、それにしても嘴兒窰台吉を二子としたのが、不可解である。それでは黃台吉の子が十四人でなく、十五人になつてしまふ。これは、やはり北虜世系や釋組考に従つて、打賴と

主兒竄は父子とすべく、兵略に之を誤つたのは、その次の弟がやはり三娘子の子だつた爲ではなからうか。

面白いのは俺答の孫、松木兒台吉の子が蒙古の活佛虎督度 (Khutuktu) となつたことである。蒙古に活佛の出たのは、俺答の勢威赫々たるためであつたらうが、それにしても極貧で賊達子といはれた松木兒の子に出たのは不思議である。蕭大亨の北虜風俗 (夷俗記) 崇佛の條に之を傳へて曰く、

俺俺答在時、往西迎佛、得達賴喇嘛歸、事之甚謹。達賴每指今松木台吉所居曰、「此地數年後、有佛出焉」。後達賴喇

嘛卒、不一年、至萬曆十六年、松木之妻孕矣。孕管祖腹中有聲、衆僧曰、「此當生佛」。比產時、兒果自言曰、「我前

達賴喇嘛也」、衆僧曰「此真向者達賴復生矣。」達賴生時乘馬念珠及經一冊、順義王西還、以此數者示兒、兒果曰「此

我之馬也」、於諸物品中、獨取念珠與經曰、「此我之故物也」、且時々作西方語、惟僧能解之。甫三四歲時、言禍福、

亦輒應。夷人聞之、於是、千里羸糧、而走謁之者、日相望於門也。咸號曰小活佛、上其事以聞。萬曆二十年奉聖旨、

陞松木之子爲朵兒吉昌、異其事也。以故夷人愈益崇佛不倦、而喇嘛之在虜中者、我歲有所賜、以獎異之。松木台吉常

居上谷西北、今順義王之親弟、其子曰虎督度、年可七八齡云。

夷俗記の成つたのは萬曆甲午 (二十二年) であるから、十六年に生れた活佛はこの時七八歳であつた。それを前表には二十年に朵兒只唱の稱號を加へられた時のこととして五六歳といつたのであらう。いづれにしてもこの人が後に第四世の達賴喇嘛雲丹札木蘇 (Yintan Jamso) になるのである。

六 順義王の六大部落

さて猛勢なる順義王の勢力範圍が六大部落十二哨に分れたことは、武備志^{卷二}六鎮戍山西の條に、兵略によつて俺答諸酋

の分地系譜を掲げた末に

以上諸酋住牧宜大山西邊外、東至獨石三間房、西至黃河豐州灘・昭君墓・威寧海・九十九泉、北至大青山等處、共六大部落一十二哨、東六西六分巢。

とあるので明かである。三間房は獨石口の邊外で、豐州灘は歸化城の東今の白塔鋪の近傍⁽¹⁶⁾、昭君墓はその南今の青冢⁽¹⁶⁾、威寧海は今の希爾泊、九十九泉はその北方の山中にあり、大青山といふのは今の陰山々脈⁽¹⁷⁾を指す。そこが六大部落十二哨に分れてゐたのである。更に兵略によれば、「大同鎮邊外住牧夷人」を説いて、

豐州灘即板升、是營名、虜王捨力克及三娘子東哨部落住牧。捨力克故、今長孫卜石兔襲封。部夷約五萬有餘。在大同德勝・殺胡堡・新平互市⁽¹⁸⁾。

といひ、「山西鎮邊外住牧夷人」を説いて

青山是營名、虜王捨力克西哨部約四萬有餘。山西水泉營紅門互市⁽¹⁹⁾。

といふ。即ち今の歸化城の邊を境として東西兩哨に分たれてゐた。それでは六大部落とは果して何々であつたか。それに答へるものはやはり武備志である。武備志⁽²⁰⁾六二鎮戍山西の條に引いた職方考に曰く、

其部落分爲東西哨、有六枝。一順義王扯力長等并素囊台吉、一設克炭台吉、一兀慎打兒漢台吉、一擺腰把都兒台吉、一青把都・白洪大台吉、一永邵卜大成台吉等、皆統于順義。板升、自豐州灘以西、至黃河三百餘里、皆板升所據、自趙全伏誅後、其餘蘇丘富等居之、今屬恰台吉分野。

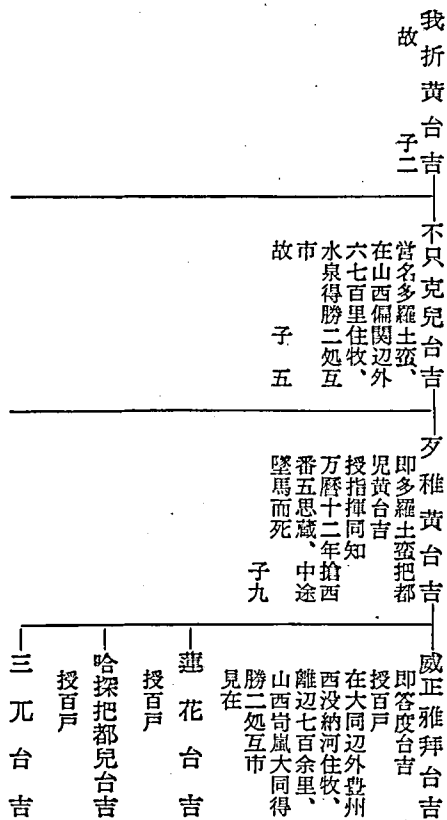
この中、青把都・白洪大が有名な老把都の子及び孫の叔姪であつて、即ち哈喇慎部の代表であり、永邵卜大成台吉は俺答の弟我托漢卜只刺台吉（博第達喇鄂特罕台吉）の子であつて、哈喇慎の北の永邵卜（永謝布）の代表である。その事は前

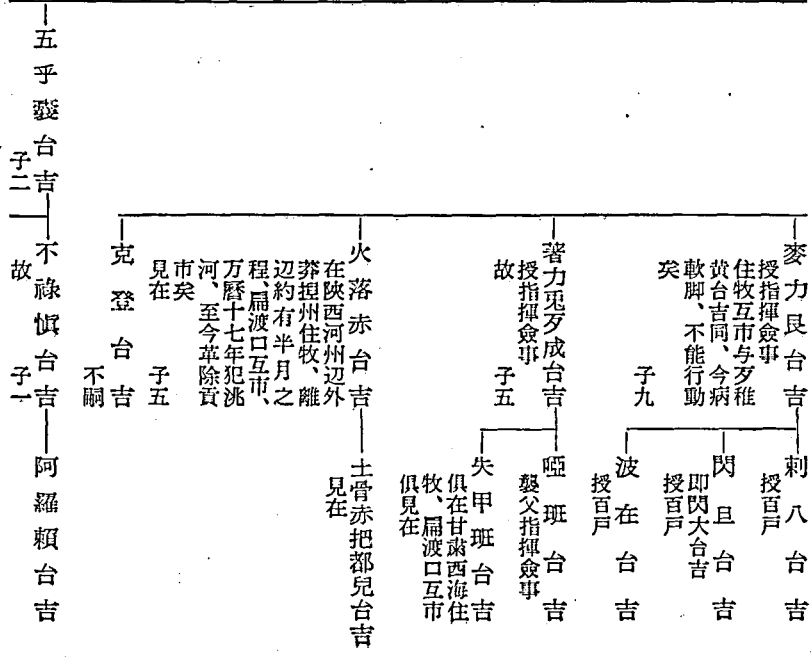
に説いた。擺腰把都兒台吉といふのは、俺答の第二子不彥台吉（擺腰台吉）の子であつて、即ち擺腰部の勢力を代表したものである。兀慎打兒漢台吉は同じく兀慎部の勢力を代表した。兀慎部というのは俺答の弟老把都の兒拉布克台吉の封ぜられた所で、源流には「佔據土默特之烏古新而居」とあり、その住地を例の籌邊纂議の順義王達子宗派には「住陽和後口胡芦海子」とし、北虜世系には「在大同鎮邊堡正北克兒一帶住牧、離邊約一百七十八里、大同守口堡五市、即陽和後口」としてゐる。克兒とは即ち胡芦海子のことであらう。胡芦海は威寧海（希爾泊）の西に並んだ湖沼である。その世系は兵略及び北虜世系等に詳かで、三雲籌俎考七二封貢考にも特に之を録してゐるが、煩を厭つて今は述べない。たゞ開祖兀慎打兒汗刺布台吉が賽那刺の四子で、即ち拉布克台吉に當り、萬曆武功錄七七俺答列傳には吉囊・俺答と並んで屢々喇不台吉の名が見える、即ちこの拉布克台吉なのであらう。その子が兀慎阿害鬼台吉、孫が問題の兀慎歹成打兒汗打兒麻台吉なのである。兀慎（烏古新）部は西哨部落の中にあつた。一の順義王扯力良等并素囊台吉は問題ないが、二の設克炭台吉は俄に明かにし難い。しかしこれが順義王の後に直に數へ上げられ、後三者が東哨部落なのに對して、前三者は西哨部落と思はれるから、これはやはり順義王の一族で、素囊台吉と相容れなかつたト石兔黃台吉即ち舍刺克炭ではあるまいか。さうとすればこれは順義王の本據で、別勢力をなしてゐたのである。順義王の直領の別部にはまた主として漢人から成つた板升部落があつた。これは安々城（脱々城）に治した俺答の義子恰台吉が統べてゐたのである。恰（ᠴᠠᠢ）は本來侍衛の意味であらうが、三雲籌俎考の夷語解説には「恰與首領同」とあり、兵略には「夷狄以恰名、即中國千把總」といつてゐる。千總把總は殆ど下士官である。

時代は少し溯るが、穆宗實錄隆慶四年十二月甲寅、總督王崇古が北虜招撫策の上言があり、その中に列擧した俺答配下の六大酋の名は殆ど全く職方考の六枝の大酋と一致するのを見る。曰く、

蓋把都俺答親弟、吉囊之子吉能等皆親弟(顯^レ)、而兀慎・擺腰・永邵卜・哆囉土贊等又多其末統親枝也。

この王崇古の列擧が當時の注目すべき強酋を網羅したのは當然であるが、その中河套の吉能を除けば、餘の六酋は必ず俺答勢力の代表者であらう。之を前掲職方考の文面と對比すれば、俺答自身が右の順義王扯力良並索囊台吉の一枝に、把都が青把都・白洪大に當り、兀慎が兀慎打兒漢台吉に、擺腰が擺腰把都兒台吉に、永邵卜が永邵卜大成台吉に相當することは議論の餘地がない。哆囉土贊といふのは俺答の叔父、達延汗の第四子阿爾薩博羅特(Arsu Bolod)の部落である。蒙古源流^{卷六}には「阿爾薩博羅特墨爾根鴻台吉統率多倫土默特之衆」とあり、北虜世系には歹顏哈の第四子我折黃台吉の系譜として左の如くある。





住牧与火落赤
同、市貫亦革

克 吳 台 吉——朝 庫 兒 台 吉

見在 子七

三雲壽祖考^ニには虜酋市場と題して「得勝堡市口互市酋長」の中に、「多羅土懣下招力兔台吉、歹顏黃台吉、麥力良台吉」の三者を挙げたが、それは右の著力兔歹成台吉、及び歹雅（雅は誤）黃台吉、麥力良台吉をいつたのであらう。なほ方孔炤の全邊略記^ニ大同略、隆慶五年の條には「哆囉土懣把都兒黃台吉者俺答之侄也、并市水泉」とあるが、勿論この歹雅黃台吉即ち多羅土懣把都兒黃台吉のことである。⁽²¹⁾

多羅土懣とは七土默特の義であつて、蒙古源流にも初めは専ら七土默特といつたが、後には多く十二土默特といふやうになつた。七土默特の舊制は審かでないが、十二土默特は恐らく後に發達した十二哨のことを云つたのであらう。とも角この格力克の時に有名になつた順義王の六大部落十二哨といふのが、既にその祖父俺答の時代から儼存したのは疑ない。但しなほ考ふるに、これら六大部落の中、把都・白洪大の一枝及び永邵卜一枝は正しくは阿蘇特・永謝布の中であつて、永謝布萬戸に屬し、土默特萬戸の中には數へられない。されば神宗實錄萬曆四十年四月總督涂宗濬の上疏によれば、この時順義王の勢力が頗る衰へたことを説いて、

初封俺答之時、與之約曰、東自宜府、西至河套、實令俺答約束。今宜府白洪大自爲一枝、河套吉能自爲一枝、虜王所制者、山（西）大（同）二鎮十二部而已。

を見える。順義王家の六大部十二哨といふは必ず土默特萬戸の中に存したもので、上述の明人の六大部の列擧は實は外觀より誤認した擬稱であつたのである。それでは眞正の六大部とは何か。世宗實錄には嘉靖三十年六月庚申、侍郎史道の言

に俺答の親枝五部の語があり、同年前月庚戌の條にその五部の名を擧げて、「把都兒・辛愛・伯腰・卜郎台・委兀兒慎台吉凡五部」としてゐる。この五部に巨帥俺答の親部を加へれば、乃ち六部の數に當り、その内容部落もや、職方考等に傳ふるところとは違つてゐるけれども、やはりその劈頭の把都兒は依然永謝布萬戸の強酋であるから、これも求めるところではない。我等は真正の六部落を求めて、遂に舊の所謂滿官嶼の六營に歸着せざるを得ない。滿官嶼が初め八營だつたのは明史紀事本末俺答封貢の條にも見え、やがて六營になつたことは、魏煥の皇明九邊考、鄭曉の吾學編皇明北虜考、瞿九思の萬曆武功錄俺答列傳、王圻の紋文獻通考、朱健の古今治平略、淵鑑類函等にも見えてゐる。皇明北虜考に曰く、

滿官嶼部營八、故屬火篩、今從俺答。曰多羅土悶、曰畏吾兒、曰兀菴、曰叭要、曰兀魯、曰土吉刺、三部(此の二字恐は衍)衆可四萬。

滿官嶼は Mongolchin である。この六營が恐らく根本のもので、所謂十二哨もこの六營が左右兩翼に分化發展したものであらう。兵略に「共六大部落十二哨、東六西六分巢」といひ、また職方考に「部落分爲東西哨、有六枝」などといったのは正にこの成立の事情を説明したものと見るべきであらう。

その中、多羅土悶部のことには既に説明した。大清一統志に鄂爾多斯部の疆域を説いて「北界多羅圖們」といつた如きは偶々この部の位置を察せしめるに足りる。畏吾兒部のごとは、兵略に「兵兎台吉故、係順義王俺答第四子、在營名威兀慎住牧」とあり、三雲籌俎考及び北虜世系に俺答の第四子丙兎台吉を謂つて「營名威武鎮、在陝西河州西海住牧、甘肅扁波口五市」とあるから、彼こそ威武鎮部の開祖で、先掲の實錄嘉靖三十年四月の條に見えた委兀兒慎台吉もその人と思はれたが、彼は嘉靖三十七八年の頃より西方遙か西海に入つて歸らなかつたので、その故地には長兄黃台台の子孫が代つて住して、やはり威兀慎營といつた。武備志卷五鎮戍宣府の條に引ける兵略によれば

西夷威兀慎營是營名、與中路葛峪堡相對、離獨石邊一百三十餘里、部落約五千有餘、在張家口互市。三娘子係己故虜王扯力克繼母、存、生二子、長子打賴台吉存、二子嘴兒岔台吉存、脫々倘不浪掌威兀慎人馬。

とある。但し三娘子忠順夫人の子は打賴台吉その他で、嘴兒岔台吉はその子で、弟では無かつたこと既述の通りである。西夷といふのは北路龍門所と相對する黃台吉の他子安兔・朝兔等の東夷兀愛營に對する稱呼である。威兀慎營の人馬は脱々倘不浪即ち前にいつた恰台吉が掌つてゐた。これが威兀慎營即ち畏吾兒の始末である。

次に兀甚は即ち兀慎で、叭要は即ち擺腰で、前者は俺答の弟兀慎打兒汗刺布台吉の後裔で、後者は俺答の次子不彥台吉の後である。この事も既に説いた。刺布台吉は「右大同鎮邊堡正北克兒一帶住牧、離邊約一百七十里、大同守口堡互市」したといふ。克兒とは大同邊外の胡芦海子附近であらう。不彥台吉は「在大同陽和邊外、西北一克菊兒革住牧、離邊三百餘里、陽和守口堡互市」してゐた。蒙古源流⁽²²⁾によると、萬曆十三年(1585)歸化城に來つて俺答の葬儀に臨席した達賴喇嘛が更に東方に巡錫して喀喇沁に向ふ途上、圖默特の衛新(Ushin)・日雅果特(Bayagod)・博爾濟吉斯(Burjgis)・毛明安(Magho Minghan)等の諸延に邀請せられて廣大精微の經を講じた由が見える。その衛新・日雅果特が兀甚・叭要なのは疑がない。

兀魯の名が黃台吉の次子五路把都兒台吉の名と關係あることは確かであらう。五路台吉は最も有力な酋長であつて、その住地は「在大同天城邊正北五克兒菊兒一帶住牧、離邊約五百餘里、新平市口互市」といふ。萬曆三十二年(1604)八月北虜五路黃台吉が數千騎を以つて鎮河口に入犯したのは俺答封貢以來の大變であつて、同三十九年(1611)四月台吉が宣大薊鎮の七十三酋を會集したのは順義王卜失兔の襲封を決定するためであつた。五路台吉はこの功によつて龍虎將軍に任ぜられた。神宗實錄萬曆四十年(1612)五月總督涂宗瀄の奏には、土默特萬戸「十二部之中、智力足以雄長諸酋者五路台

吉也」といひ、「公正足以懾服諸酋者、兀慎台吉也」に對照せしめてゐる。これが兀魯部の酋長でなくて何であらう。

最後に滿官唄六營の一たる土吉剌は殊域周咨錄には土不剌に作つてゐるけれども、何れにもせよ、他に所見のないこの部のごとは考へようもない。張爾田氏は蒙古源流の註に之を王吉剌の訛と見て、元代の弘吉剌の遺名と見たけれども、それでも解釋はつかぬ。⁽²³⁾元史⁽²⁴⁾本紀至元五年五月の條にも秃不剌の名が見えるけれども、それでも致し方がない。以上の外、滿官唄の總名の起りの蒙郭勒津は當時より今日まで土默特都と關係が深いが、どういふものか、その性質が明白でない。姑く記して後考を俟つ。

武備志北虜考に載せた總制涂宗澹の順義王ト失兎を脅した語には聊か諸部の位置を窺はせるものがある。曰く、

爾ト酋、將以守邊爲功乎。我將自山西水泉營至得勝堡、割而與素囊守。自得勝至新平、割而與兀慎・擺腰守。自新平至新河、割而與五路守。自新河至宜鎮、割而與白洪大守。人自貢、人自市、無煩王也。

この假定の分割が各酋割據の位置を示したことは勿論であるから、素囊に擬せられた西偏の地は即ち歸化城方面であつて、順義王根據の中心に當り、その東に連つて兀慎及び擺腰の部落があり、更に東は五路台吉に屬し、東端の宣府鎮邊外の地が哈喇慎の地であつたのであらう。

七 鄂爾多斯部の世系

さて愈々俺答哈の霸業について説くべきであるが、それより前に右翼濟農の正系、鄂爾多斯部について一言して置くのが便利であらう。鄂爾多斯旗の成立については蒙古源流に委細の説明があり、その子孫も今に存續して居るから、察哈爾土默特諸部とは異なり、その始末も割合明かである。蒙古源流は鄂爾多斯右翼前旗の酋長(薩囊徹辰)の親ら記したもの

であるから、その敘述は精密を極め、殊にその世系の如きは、恐らくその家に傳はる系譜をそのまま寫したものであつて、最も信憑に値するものである。明の葉向高の四夷考^七北游考にも

歹顏哈有十一子、次曰賽那刺、有七子。長吉囊、次俺答、皆雄點善兵。吉囊壁河套、名襖兒都司、直關中。俺答壁豐州灘、直代・雲中、吉囊・俺答各九子、子各萬騎。

とあるが、蒙古源流^六には吉囊即ち衮必里克濟農死し、その九子が互に分立割據したことを語つて、左の如くある。

於是、兄弟九汗分析另居。諾延達喇濟農 (Noyandara Jinong) 佔據四營 (vier Khoriyā)。拜桑固爾 (Baisanghor) 另據右翼扣克特・錫包沁 (Keiked Shibaghochin)・烏喇特・圖伯特 (Urad Tangghud)。衛達爾瑪 (Oidarma) 佔據右翼達喇特杭錦 (Dalad Khangkin)・墨爾格特巴幹 (Merged-Bakhan)。諾木塔爾尼 (Nom Tarni) 佔據右翼巴蘇特衛新 (Basod Ushin)。布揚古齊 (Buyanggholai) 佔據右翼伯特金・哈里郭沁 (Betekin Khalighochin)。班札喇 (Bandsara) 佔據左翼浩齊特・克里野斯 (Khochid Geriyes)。巴特瑪織巴幹 (Badma Sambhawa) 佔據左翼察哈特 (Tashad)・明阿特 (Minghad)・科爾沁之三十四處 (Khorchin Khoin und Guchin)。阿穆爾達喇 (Amudara) 佔據右翼四鄂托克衛郭爾沁 (Uighurchin)。鄂克拉罕 (Öklekhan) 佔據右翼三鄂托克阿瑪該 (Amakhai) 而居。

今これらの位置を考へる前に、蒙古源流によりてこれら酋長の系圖を示せば左の如くである。

—諾延達喇濟農
四營

—Buyan Baghatur Khungtaiji
布延巴圖爾鴻台吉

—Bosjuktu Jimong
博碩克圖濟農

—Sereng Erdeni Khungtaiji
策凌額爾德尼洪台吉

—Oljoi Bing Khungtaiji
諤勒哲炳鴻台吉

—Rinchen Deychi Daiching
林沁額葉齊岱青

—Bandi Mergen Soriktu
班第墨爾根卓哩克圖

—Toba Taiji
圖巴台吉

—Manjus'ri
滿珠錫哩

—Tsolia Taiji
吹拉台吉

—Nontu Dügüreng Noyan
諾木圖都古稜諾延

—Ombo Dalai Noyan
鄂木布達賚諾延

—Ölku
—

—Bibikei Odkhan Baghatur
必巴錫鄂特罕諾延

—Gaderai
庫德德

—Saran
色凌

—Mangus Tsökögur
莽固斯楚固庫爾

—Bonaban Khung Baghatur
布納班鴻巴圖爾

—Bodhis'ri Ilduchi
布達錫哩伊勒都齊

—Bumba Taiji
本巴台吉

—Abaghai Odkhan
阿巴海鄂特罕

Soriktu Buntai Daiching
— 吉 台 台 台 台
Soriktu Buntai Daiching
— 吉 台 台 台 台
Bayantai Taiji
— 吉 台 台 台 台

Baiangkong Lang Taiji
— 拜 桑 固 爾 台 吉
— 右 環 扣 克 特 錫 包 沁 烏 喇 特 圖 伯 特
Aiahish Dayan Noyan
— 愛 達 必 斯 達 延 諾 延
— 吉 台 台 台 台 台
Achiu Dayan Noyan
— 阿 齊 圖 達 延 諾 延

Eiscengri Bindu Noyan
— 額 成 吉 爾 圖 諾 延
Mechin Od Khan Noyan
— 錫 齊 克 鄂 特 拜 諾 延

Aobla Soriktu Noyan
— 額 田 卓 爾 克 圖 諾 延
— 吉 台 台 台 台 台
Ananda Khozhigochi Noyan
— 阿 南 達 在 碩 齊 諾 延

Tsoktu Taiji
— 綽 克 圖 台 吉
Anu Sang Taiji
— 阿 穆 桑 台 吉
Dorji Daiching
— 多 爾 濟 台 吉
Toha Yeldeng
— 圖 巴 札 勒 丹

Daghai Zaisang Noyan
— 達 噶 濟 特 桑 諾 延
— 班 蒙 敏 敏 台 吉
Bantsonq Khungtaiji
— 班 松 翁 特 依 台 吉

Kündülen Noyan
昆都楞諾延貝瑪圖

Oidarma Nomghan Noyan
衛達爾瑪諾木歡諾延

右翼
達喇特杭錫
墨爾格特巴罕

Daki Khoshigochi
達奇和碩齊鴻台吉

Ritad Khungtaiji
奇塔特鴻台吉

Lama Waiir Galong
喇嘛齊爾格隆

Tünendari Setsen Khoshigochi
圖們達理徹辰和碩齊

Khainuk Baghatur
海努克巴圖爾諾延

Kitadai Baghatur
奇塔特位巴圖爾

Kusegochi Khulachi
固哲格齊固拉齊

Tonni Mergen Noyan
圖達爾爾根諾延

Dibashi Noyan
必巴賽諾延

Kusentai Noyan
庫森德諾延

Akya Kündülen Daiching
阿恰昆都楞位齊

Oimosun Zaisang Khoshigochi
衛瑪遜宰桑和碩齊

Sangjai Tsokegur Noyan
桑察楚庫克爾諾延

Tairige Ching Baghaur
楚哈克吉巴圖爾
Khatan Baghaur
哈坦巴圖魯

Ching Baghaur
青巴圖爾

Tuchi Sesen Kungur
道濟徹辰控庫爾
Ulugün Khungtaiji
認努昆鴻台吉

Ishigen Taiji
伊實欽台吉

Sabandara Taiji
薩班達喇台吉

Eskel Taiji
額斯克勒台吉

Kissel Oisong Soriku
庫色勒衛徹卓哩克圖
Dorji Oisong
多爾濟衛徹

Sanchang Khungtaiji
桑鴻台吉

Nom Tarni Goa Taiji
諾木塔爾尼郭幹台吉

右翼
巴蘇特衛新

Khutukai Sesen Khungtaiji
庫圖克台徹辰鴻台吉
Ojoi Iduchi Darhan Baghaur
認勒哲伊勒都齊達爾巴圖爾
Batu Taiji Sanan Sesen
巴圖台吉——薩囊徹辰

Sidalai Sesen Tsokegur
錫塔台徹辰楚庫克爾

Kuidekai Bindu Daiching
昆德德賽圖岱青

Buyantu Sesen Soriku
布延岱徹辰卓哩克圖

Bumbatai Tosku Taiji
木 田 谷 綿 京 圖 台 昔

Bumbas'ri Selsen Baghatur
木 巴 錫 哩 徹 辰 巴 圖 爾

Danas'ri Khatan Baghatur
藥 納 錫 哩 哈 坦 巴 圖 爾

Mangus Erdeni Khulachi
莽 固 斯 額 爾 德 尼 郭 拉 齊

Saindara Ching Baghatur
賽 音 羅 喇 哇 巴 圖 爾

Anudar Mergen Taiji
圖 魯 達 爾 圖 爾 根 台 昔
Turui Ching Khulachi
圖 魯 青 固 其 齊

Buyanggholai Toghar Daiching
布 揚 古 賚 都 喇 勒 岱 青

Belgen Daibung Noyan
伯 勒 格 岱 綱 諾 延
Ajim Daibung Noyan
阿 津 岱 綱 諾 延

Borsai Selsen Daiching
布 爾 賽 徹 辰 岱 青
Sadai Khoyochi Khungtaiji
薩 台 固 質 鴻 台 昔

Sazai Baghatur Khungtaiji
薩 哉 巴 圖 爾 漢 台 昔

Oirad Mergen Noyan
衛 拉 特 圖 爾 根 諾 延

Adai Yeldeng Khoshighochi
額 德 伊 勒 登 和 碩 齊

右 翼
伯特金哈里郭沁

Banjara Oisong Noyan
班札喇衛徵諾延
左翼
浩齊特克里野斯

Dorji Darkhan Daiching
多爾濟達爾罕位青

Mingkhai Ching Uaiching
明愛青位青

Yongdolai Oisong Noyan
鐘都齊衛徵諾延

Takci Oisong Khungtaiji
達什衛徵鴻台吉

Dalai Zaisang
達賚桑

Sharab Tsoktu
錫喇卜綽克圖

Ongghoi Tsökegur
翁奎楚庫克爾

Rashiyen Taiji
喇錫延台吉

Abantai
阿巴台

Engke Khoshighochi
恩克和碩齊
Sangji Khoshighochi
桑濟和碩齊

Tashto Mergen Soriku
察庫墨爾根卓哩克圖

Sereng Khahan Baghatur
色冷哈坦巴圖爾

Baghatud Taiji
巴圖特台吉

Badma Sambhawa Setsen Bayatur
巴特瑪緞巴幹徹辰巴圖爾

左翼
察哈明阿特科爾沁

Amudara Darkhan Noyan
阿穆爾達喇達爾罕諾延

右翼
四鄂托克倫郭爾沁

Tümeçai Darkhan Daçhing
圖墨德發爾罕岱青

Siddhia Tsökegur
錫達及楚克庫爾
Bumbadar Taiji
本巴達爾台吉

Bumbai Daçhing Noyan
本拜岱青諾延

Bumbas'hi Taiji
本巴錫哩台吉

Tsarbai Taiji
察哩台吉

Achi Taiji
阿奇依台吉

Sakin Taiji
薩欽台吉

Elelei Taiji
額萊格台吉

Bumba Taiji
本巴台吉

Turui Taiji
圖驪台吉

Mingkai Eyechi Noyan
明安額葉齊諾延

Jibakci Taiji
必巴錫台吉

Engkes'ri Taiji
恩克錫哩台吉

Mongkes'ri Taiji
蒙克錫哩台吉

Uklehan Yeldeng Noyan
鄂克拉罕伊勒登諾延

右翼
三鄂托克阿瑪該

Kechige Yeldeng Noyan
克齊吉伊勒登諾延

Buimatu Noyan
貝瑪圖諾延

Zaisang Noyan
宰相諾延

Zaisangkhor Khulachi
宰桑固爾固拉齊

Gombo Taiji
袞布台吉

Bodhis'ri Khungtaiji
博迪錫哩鴻台吉

Emeghetlai Daching
額默格勒德位齊

Lawai Taiji
拉拜台吉

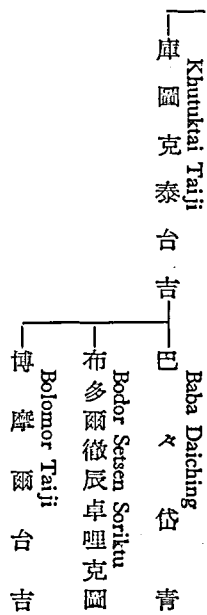
Engke Taiji
恩克台吉

Buiburi Noyan
貝博哩諾延

Engkes'ri Taiji
恩克錫哩台吉

Engkes'ri Taiji
恩克錫哩台吉

Engkes'ri Taiji
恩克錫哩台吉



羅馬字は専らシュミットに據つて發音を示した。但し漢譯本には諸延達喇濟農の第三子鄂木博達齊諾延の子を「鄂木博達齊諾延生子必巴賽鄂特罕巴圖爾・庫德德色凌二人」とあり、滿文原本でも殆ど同様であるが、これは明かに誤脱であつて、鄂木博にはタニー子 (Okke) があり、その弟必巴賽鄂特罕諾延に庫德德 (Gülden) 色凌 (Saran) の二子があつたのである。これは獨譯本と比較する時に明瞭である。また衛達爾瑪の第四子楚噶克青巴圖爾と第五子托濟徹辰楚庫克爾とが後の條になるとあべこべの順位になつて居り、鄂克拉罕伊勒登の第二子貝博里と第三子庫圖克泰の場合にも同じく顛倒してゐる。また班札喇の第二子鍾都類の場合には「鍾都類衛徹庫伯袞達什衛徹鴻台吉云々」とあるけれども、この庫伯袞 (Kubegun) は蒙古語の子といふ意味なことは江實氏(24)の指摘の如くで、こゝでは鍾都類衛徹生子達什衛徹鴻台吉云々」と誤むべきことは勿論である。

なほ明の蕭大亨の北虜世系に傳ふところも、源流の所傳と誠に符節を合すやうなので、煩を厭はず左に掲げる。

北虜世系

麥力良吉囊

即魏兒都司
在陝西延寧河套
一帶辺外住牧、

東至黃甫、與山
西岢嵐相隣、西
連寧夏甘肅三
鎮、諸營貢市
子九

那言大兒吉能

初該授都督同知
俱在陝西榆林辺
外河套住牧
子五

西哨把都兒黃台吉

授都督同知
住牧同上、為西
瓦刺所殺、子一

丟兒蓋朝庫兒台吉

見在
在甘肅永昌辺外
昌寧湖一帶住牧

圪赤圪台吉

故
同上住牧
子二

碗布台吉

授指揮僉事
不嗣
為弟比把石所殺

比把石台吉

授指揮僉事
因殺其兄、家財
俱已分散
見今閑住

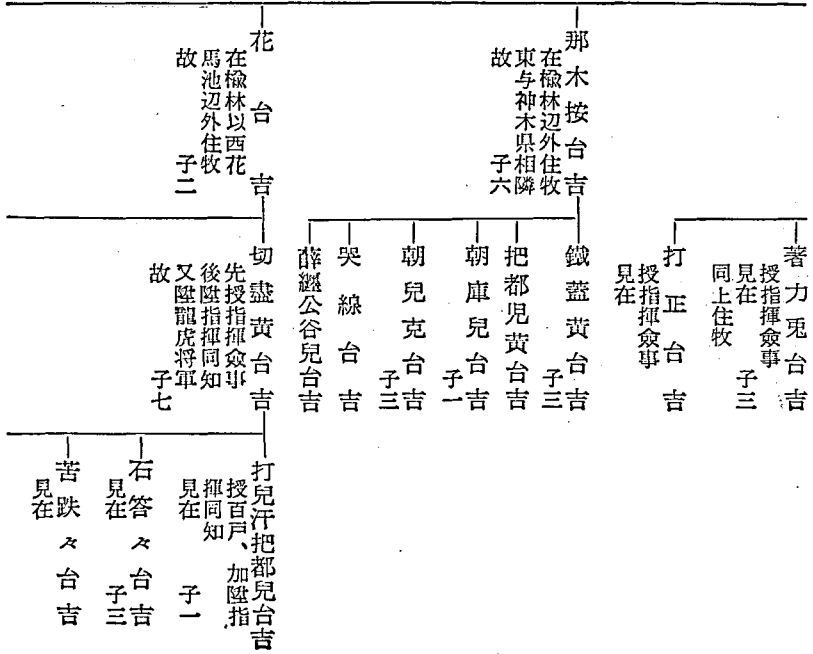
資兔台吉

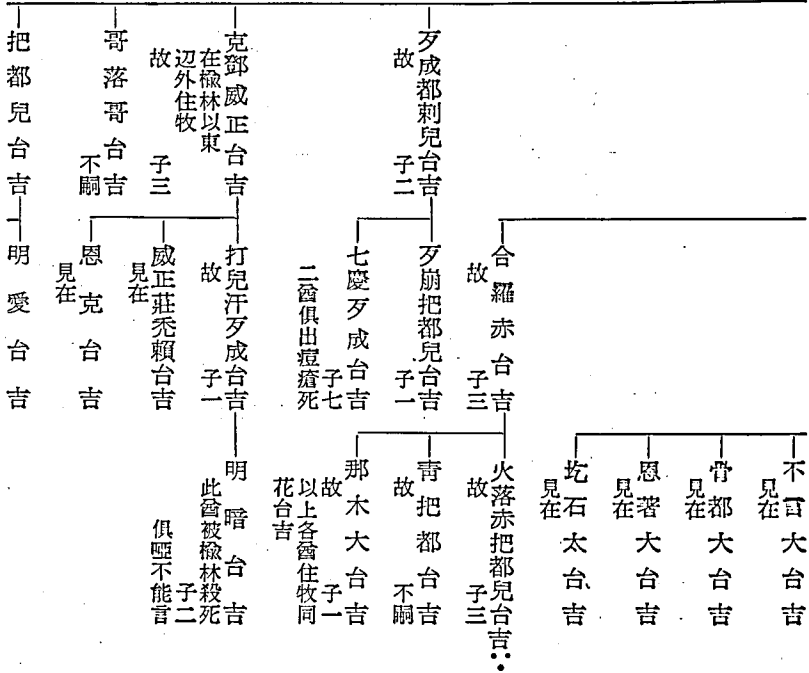
授指揮同知
故
在甘州莊浪辺外
松山住牧
子三

狼台吉
故
子三

卜失兔台吉

授都督同知
因在甘州水泉被
創、損失兵馬糧
重、及榆林殺明
暗、乃讐恨





子二

見在

土麥台吉

見在

哈麻艾旦台吉——虎禿大台吉

故 子三

故

各酋俱在榆林
孤山辺外住牧

那木大兒吉能が諾延、達喇濟農で、西哨把都兒黃台吉が、布延巴圖爾、鴻台吉、卜失兔台吉が、博碩克圖濟農なことは議論がない。丟兒蓋朝庫兒台吉は莽固斯楚固庫爾で、碗布台吉は鄂木布達資諾延、比把石台吉は必巴錫鄂特罕諾延であらうから、残りの圪赤圪台吉が諾木圖都古稜諾延に當ることは確かであらう。その注によつて色んなことが解る。狼台吉のことは明史^{卷三}韃靼傳等にも嘉靖二十一年「吉莖死、諸子狼台吉等散處河西、勢既分、俺答獨盛」など、見えてゐるが、即ち拜桑固爾狼台吉である。その子資兔台吉は額成吉炳圖諾延の父、愛達必斯達延諾延であらう。著力兔台吉は疑もなく諤巴卓哩克圖諾延である。その弟打正台吉はその弟塔噶濟宰桑諾延であらうが、後に引く兵略によれば、「打正台吉即宰僧」とある。那木按台吉は勿論衛達爾瑪諾木歡諾延である。鐵蓋黃台吉は達奇和碩濟鴻台吉、朝兒克台吉は楚噶克青巴圖爾、哭絲台吉は庫色勒衛徹卓哩克圖、薛繼公谷兒台吉は托濟徹辰控庫爾に相違ないから、朝庫兒台吉は恐らく桑寨楚克庫爾諾延の父阿恰昆都楞岱青であらう。

花台吉は諾木塔爾尼郭幹台吉である。その子切靈黃台吉は庫圖克台徹辰鴻台吉、蒙古で尤も聰明と稱せられた男であり、その子打兒汗把都兒台吉は即ち諤勒哲伊勒都齊達爾罕巴圖爾、その子が巴圖台吉で、孫の薩囊徹辰鴻台吉こそ即ち蒙古源流の編者である。打兒汗把都兒の弟石答々台吉は達爾罕巴圖爾の弟錫塔台徹辰楚庫克爾、苦跌々台吉は昆德々資圖岱

青、不言大台吉は布延岱。徹辰卓哩克圖。さうして見ると、骨都大台吉、恩睿大台吉、圪石太台吉もそれぞれ本巴岱緯克圖台吉、本巴錫哩徹辰巴圖爾、達納錫哩哈坦巴圖爾に當るのであらう。切盡黃台吉の弟合羅赤台吉は徹辰鴻台吉の弟布延達喇古拉。青巴圖爾で、その子の火落赤把都兒台吉は莽固斯額爾德尼郭拉齊であらう。明の記録の青把都台吉、那木大台吉が蒙古側に見えないことは、蒙古の記録の賽音達喇や阿穆達爾等が明側に見えないのと同様である。花台吉の弟、歹青都刺兒台吉は源流の勇將布揚古齊都。喇。岱。青。であり、その子歹崩把都兒台吉及び七廐歹成台吉は源流の伯勒格岱。細。諾延及び布爾賽徹辰。岱。青。である。歹成都刺兒の弟克鄧威正台吉は源流の班札刺衛。微。諾延であり、その子の打兒汗歹成台吉は多爾濟達爾。罕。岱。青。で、孫の明暗台吉は明かに明愛青岱青である。打兒汗歹青の弟威正莊禿賴台吉及び恩克台吉は鍾。都。齊。衛。微。諾延及び恩克和碩齊である。

世系の哥落哥台吉は不嗣とあるところから見ると、確に源流の巴特瑪繖巴韓であり、把都兒台吉はその子に明愛台吉・土麥台吉があるところから見て、阿穆達喇達爾罕諾延とその兩子の明安。額葉齊諾延及び圖墨。德。達爾罕岱青である。最後の哈麻艾旦台吉、虎禿大台吉父子は鄂克拉罕伊勒登諾延、庫圖克泰。合吉の父子と見る外はなからう。即ち兩者は殆ど全く一致するのである。因みに薩囊徹辰 (Sanang Setsen) と正しう Sagang Setsen であるといふが、姑く旧に仍る。

また萬曆武功錄七卷俺答列傳の中には左の如く述べてゐる。

吉囊居河套、生子男二十有一人、長吉能、次大那顏、次小那顏、次僧戒阿不孩、次革革阿不孩、次孛吉兒阿不孩、次虎喇吉、次祝囊權、次釋台吉、次狼台吉、次都喇台吉、次背騰台吉、次格力箇台吉、次那木漢台吉、次白馬台吉、次威正台吉、次黃台吉、次打兒漢台吉、次良定台吉、次筆寫契台吉、子女一、耐賴。或言子一、委兀慎打兒汗台吉。或曰子四、曰吉能、曰打兒漢台吉、曰銀錠把都兒台吉、曰筆寫契台吉。通貫傳及
欽定四庫全書吉能生五子、長把都兒黃台吉、次炒忽兒

台吉、三子莫可考、次隱布台吉。次北把什台吉、七姪、有衆數萬、亦居河西套中舊東勝・豐州地。

その中最後の「吉能生五子」は蒙古源流とも北虜世系とも同じで、即ち長子把都兒黃台吉も次子炒忽兒台吉（朝庫兒台吉）もそのまゝ正しく、三子は考ふべきなしたが、四子隱布台吉（碗布台吉）も、五子北把什台吉（比把石台吉）も變るところはない。その七姪といふのは從子賓兔台吉等七人と見て、別に差し支へはない。吉囊の子孫は勿論諸達喇濟農、打兒漢台吉は阿穆達喇之子を四人といふのは、注にもある通り、通貢傳によつたものだが、吉能は勿論諸達喇濟農、打兒漢台吉は阿穆達喇達爾。諸達、銀錠把都兒台吉は鄂克拉罕伊勒。登。諸達で、筆寫契台吉は誰に當るか解らないが、これも吉囊の子なることは間違ひなからう。たゞ吉囊の子は九人なのに「生子男二十有一人」は明かに間違ひである。どうしてかういふ間違ひを生じたかといふと、例へば大那顏、小那顏などいふところから見ても、たゞの通稱で、他に正名のあるのを漫然と數へあげた結果であらう。その中、字吉兒阿不孩などは前にいつた武備志北虜考などに吉囊の子を不及兒板不孩といつてゐるのと甚だ似てゐるやうであるが、確かでない。或は乃ち諸達喇吉能のことかも知れない。蔣台吉は後に出て來る切盡黃台吉の父で、第四子諾木塔爾尼に當り、狼台吉は第二子拜桑固爾狼台吉で、都喇台吉は恐らく第五子布揚古齊都喇勒岱青で、那木漢台吉は疑もなく第三子衛達爾瑪諾木歡諾延に當り、威正台吉は第六子班札喇衛衛諾延、打兒漢台吉は第八子阿穆達喇達爾罕諾延、良定台吉は第九子鄂克拉罕伊勒登諾延に當るであらう。格力箇台吉は北虜世系の哥落哥台吉で、即ち源流の第七子巴特瑪繼巴斡であらう。この人が早く死んで、後がないといふのは、實はこれが明の記録に見える小十王で、嘉靖十九年の頃明軍と戦つて戦死したためではなからうか。⁽²⁵⁾ さすれば、これで九子の數は盡きるので、餘の諸名は皆これら⁽²⁶⁾の別名の繰返しであらう。女子の討頼といふのは或は威權赫々たる女婿の威正恰他不能の妻であるかも知れない。

蒙古源流^六によれば、鄂爾多斯濟農の相承を説いて、

初賽音阿拉克之父、年二十九歲、於壬申年^(一五七二年)爲濟農、在位二十年、歲次辛卯^(一五八一年)、年四十八歲卒。其後、哀必里克墨爾根濟農、歲次壬辰^(一五八二年)、年二十七歲爲濟農。與弟阿勒坦汗二人爲首、率右翼三萬人、行兵中國、至晉達噶^(Dsendeg)山谷口、明兵進戰。墨爾根濟農之子布揚古賽都喇勒岱青^(Buyanggholai Toghar Daiching)、阿勒坦汗之子僧格都古楞特穆爾^(Senge Dugireng Temur)二人、衝入明兵隊内、來往突擊三次、大破晉達噶大隊、撤兵而回。

とある。吉囊(濟農)・阿勒坦(俺答)が明に侵寇したことは數多く、晉達噶山谷口は何處だか解らないから、これはいつのことだか解らない。源流には更に續けて哀必里克濟農の諸子を敍した後に、

墨爾根濟農爲濟農十九年、歲次庚戌^(一五五九年)、年四十五歲卒。子諾延達喇壬午年生、歲次庚申^(一五六〇年)、年三十九歲爲濟農。於是、兄弟九汗分析另居。

といひ、また

諾延達喇濟農位濟農位二十三年、歲次甲戌^(一五七四年)、年五十三歲歿。

といふ。しかし明の記録による限り、吉囊は嘉靖二十一年頃歿したのであるから、それが同二十九年まであるわけがない。源流自身によつても、壬午の年嘉靖元年に生れた諾延達喇濟農は歲次庚申年三十九歲で位を嗣いだのでは歲次甲戌年五十三歳まででは到底在位二十三年になり得ない。これはどうしても嘉靖二十二年歲次癸卯頃に位を嗣いだものでなければ

ばならぬ。

否それのみではない。諸延達喇濟農は歲次甲戌に卒したとあるけれども、これは恐らく明の神宗實錄萬曆三年夏四月の條に「北部同知吉能死、命其子把都兒襲父職」など、あるに依つて勘案したもので、事實ではなく、事實は萬曆武功錄卷一にも明かな通り隆慶六年三月三日に死んだのである。

諸延達喇濟農は父衮必里克濟農の後に嗣いで鄂爾多斯部の長となつた。それは明史卷三三王崇古傳にも「吉囊子吉能據河套、爲西陲諸部長」とあるによつても明かであるが、隆慶五年俺答封貢の際には吉能は俺答の長弟老把都及び俺答の長子黃台吉と同じく特に都督同知を授けられてゐる。然るに諸延達喇の死するや、同時に嗣子布延巴圖爾鴻台吉また外征の途に薨れ、濟農の位は一旦にして幼弱なる嫡孫博碩克圖の守るところとなつたのである。布延巴圖爾鴻台吉は明の記録に把都兒黃台吉に作る。穆宗實錄隆慶六年七月乙酉、兵部左侍郎石茂華の防秋事宜の中に

今會長吉能物故、其子把都兒黃台吉未回。尙有打兒漢台吉諸酋、分據套中、名分未定、統屬無人、恐各酋自相雄長。とあり、源流に傳ふところ、この時恰も右翼諸部の互刺討伐正に酣にして、巴圖爾鴻台吉兄弟も哈爾孩 (Kharghai) の兩に至り、八千輝特 (Naiman Mingghan Khoit) を討平したが、鴻台吉は敵酋額色勒貝侍衛 (Esebei Kya) のために克爾齊遜 (Kerchism) 河畔に欺き殺されたといふ。即ち世系の表に「爲西瓦刺所殺」とあるのがこれであつて、打兒漢台吉とは同表の把都兒台吉で、源流に見える阿穆達喇達爾罕諾延 (Amudara Darkhan Noyan) のことであらう。

蒙古源流卷六には

其布延巴圖爾台吉 (Buyan Baghatur Taiji) 被害後、於乙亥年(萬曆三年一五七五年)、庫圖克台鴻台吉云、「父歿於家、子殘於敵、今八白室內、不可無奉祀之人」博碩克圖濟農 (Bushuktu Jinong) 乙丑年生、歲次丁丑(萬曆五年一五七七年)年十三歲、至

是、立爲濟農。

とある。庫圖克台鴻台吉は諾木塔爾尼鄂斡台吉（花台吉）の子徹辰鴻台吉（切盡黃台吉）で、當時河套の指導者であつた。即ち源流の著者薩囊台吉の曾祖である。河套の濟農が即ち八白室奉祀の責任者だつたことを知るべきである。博碩克圖濟農は明の記録に所謂ト失兎であるが、その無力なりしことは、明史二八梅國楨傳にも

初ト失兎爲都督、其部長切盡台吉最用事、切盡台吉死、ト失兎不能制諸部。

とあるのでも解る。なほ明史三九杜桐傳萬曆十七年の條にも「時ト失兎以都督同知、爲套中主、威令不行、其下各爲雄長」とあり、同書三三韃靼傳萬曆三十五年夏總督徐三畏の言には「河套之部與河東之部不同、東部事統於一、約誓定、歷三十年不變、套部分四十二枝、各相雄長、ト失兎徒建空名於上」とも見えてゐる。博碩克圖濟農の治世は頗る長かつたが、その統制力を缺いた狀は想察出来る。統制を失つた河套の諸酋は萬曆十八九年の頃から再び明邊の窃犯を始め、ト失兎は却つてその頭首になつた。殊に萬曆二十年明の寧夏の副總兵臚拜の叛亂を扱けた際の如きは最も猖獗を極めたといふ。蒙古源流七卷に

歲次壬辰（萬曆廿年）鄂爾多斯之博碩克圖濟農、於二十八歲時、佔據鄂爾多斯萬人、行兵明地之星錫庫（Shing shigu）河三日、大有俘獲而歸。

とあるが、これは明史三七韃靼傳に「二十年、寧夏叛將臚拜等勾ト失兎・莊禿賴等、大舉入寇、總兵李如松擊敗之」を見えるものに當るであらう。莊禿賴とは即ちト失兎の從叔鐘都齊衛徵諾延のことである。源流にはまた「歲次甲午（萬曆三二）徹辰濟農年三十歲、復行兵明地、由阿拉帶（Alak）前往、榆林城（Temeghetu）之馬姓總兵追至、云々」とある。これは明史韃靼傳に、二十二年「秋ト失兎入固原、遊擊史見戰死、延綏總兵麻貴禦之、閏月始退、全陝震動」と見えるもの

で、馬姓の總兵とは即ち總兵麻貴のことであらう。⁽²⁸⁾

博碩克圖濟農は歲次丙申萬曆二十四年に兵を西圖伯特地方に用ひて古嚕索納木札勒 (Guru Sodri-Nam-Gjal) の沙喇衛郭爾 (Shira Uighur) を招服し、頗る喇嘛教を尊信し、歲次甲寅萬曆四十二年に五十歳の時邁達哩胡土克圖 (Maidari Khutuktu) の大慈諸們汗 (Yekede Asarakchi Nomun Kaghan) の號を贈つたので、邁達哩胡土克圖は彼に徹辰濟農汗 (Sesen Jinong Khaghan) の尊號を贈つた。この時右翼の庫圖克台徹辰洪台吉の長子、巴圖洪台吉 (Baru Khungtaiji) の子薩納囊台吉は十一歳で、肇めて喇嘛教を傳へた徹辰洪台吉の後裔に係はるからといふので、その祖名薩納囊徹辰洪台吉 (Sanang Sesen Khungtaiji) の號を給與せられ、やがて年僅に十七歳にして「位列大臣之職、任以政事、大加寵眷」とある。薩納囊徹辰は即ち源流の著者であつて、時は正に萬曆四十八年 (泰昌元年) のことである。その翌年辛酉の年には博碩克圖濟農はまた明の榆林城を犯したが、年を越えて歲次甲子天啓四年に年六十歳で歿した。その子は策凌額爾德尼洪台吉 (Sereng Erdeni Khungtaiji) ・林沁額葉齊岱青 (Rinchen Eychi Daiching) ・圖田台吉 (Tobataiji) ・吹拉台吉 (Tsolia Taiji) の四人あつたが、「長子策凌額爾德尼洪台吉、辛卯年生、歲次丙寅^(天啓六年)年三十六歲即位、閏六月、即於是年歿」したので、「次子林沁額葉齊岱青係庚子年生、丁卯年^(天啓七年)二十八歲即汗位、謂係有根基人之子、遂上薩納囊徹辰洪台吉之號、稱汗」とある。天啓七年は清の太宗の天聰元年であつて、この時清朝勃興の勢は支ふべからずなつたから、薩納囊徹辰は鄂爾多斯の部衆を統馭して、之を邀へ討たんとしたが、力及ばずして已むだといふ。林沁は即ち清朝に降附した額璘沁濟農である。然るに明史^{卷三九}官秉忠傳によれば左の如く見える。

吉能者卜失兔子、爲套中之主、土馬雄諸部、見卜失兔襲順義王、補其五年市賞、遂挾求封王、且還八年市賞、邊臣不

許、則大怨。

ト失兔の子吉能とは即ち林沁濟農である。これが河東のト失兔が順義王襲封のことを羨んで、滯つた五年の市貨を補ひまた八年は市貨を還して自ら封王を求めたといふのである。

吉囊の諸子が分立した時、長子諾延達喇の據つたといふ四衛とは何處だか明かでないが、額璘臣濟農は今の鄂爾多斯左翼中旗の祖である。左翼中旗は今俗に郡王旗もしくは單に王旗といふ。蓋し鄂爾多斯七旗中この旗の札薩克のみが唯一の郡王であるからである。張穆の蒙古游牧記によれば、鄂爾多斯の「正中近東爲左翼中旗」といひ、詳しくその四至を示してゐるが、今の地圖では明かでない。北虜世系には「在陝西榆林邊外、河套住牧」とあり、明の茅元儀の武備志^{卷二}鎮戍延綏の條に引いた兵略には

神水灘是營名、河套酋首ト失兔住牧、與榆林鎮城相對。部落約二萬有餘、離邊三百餘里、在榆林紅山互市とある。今郡王府は榆林縣の正北、東勝の南にある。

九 他の諸部の成立

吉囊が西海の亦不刺を討つてから後、河套の酋首には頻りに西方に發展する者があつたが、把都兒黃台吉の諸弟朝庫兒台吉（莽固斯楚庫固兒）、圪赤圪台吉（諾木圖都古稜）等も「在甘肅永昌邊外昌寧湖一帶住牧」と見えてゐる。これは今の甘肅永昌の邊外、阿拉善旗自治區内である。

明史^{卷三〇}西番諸衛傳には、明末の陝西三大寇といふものを數へて「一河套、一松山、一青海」といふ。その中松山とは今の甘肅涼州の松山驛に當り、當時は東方寧夏鎮と西方甘肅鎮とを聯絡すべき必須の要衝であつたのである。虜寇の此處に窺據するに至つたのは専ら俺答の西征と關係あるが如く、明史西番諸衛傳には

俺答……亥青海宮僞、〔嘉靖〕三十八年、擄子資兔・丙兔等數萬衆、襲據其地、卜兒孩竄走、遂縱掠諸番、已引去。留資兔據松山、丙兔據青海、西寧亦被其患。

とあり、同二七卷三韃靼傳にも

俺答常遊處青山。二子、曰資兔居松山、直蘭州之北。曰丙兔居西海、直河州之西。

と見える。この資兔といふのは、隆慶五年俺答受款の際には諸酋に率先して指揮同知を續けられたもの、その俺答の子といふのも、一見疑ないやうである。しかし前掲の北虜世系及び武備志所引の兵略の系譜によれば、俺答の九親子一義子在中、丙兔はあるが、資兔は之と比定すべきものがない。却つて明史卷三王崇古傳には「吉能據河套、爲西陲諸部長、別部資兔駐牧大小松山」とあり、穆宗實錄隆慶五年二月總督王崇古の奏にも「吉能子弟資兔諸酋、必爲蘭・靖・洮・河之患」と見えて、資兔は實は套虜の別部なるかの疑がある。更に神宗實錄萬曆二十七年春正月庚寅、甘肅巡撫田樂の疏によれば、當時松山住牧の虜酋を列擧して左の如くある。

隆萬間、歙市一起、招致資酋擄弟着力兔・宰相、子阿赤兔・額勤革・麻記、婿尙不浪、盤窟其中。

之を先きに掲げた源流所傳の系譜と對照する時、吉囊の第二子拜桑固爾の長三子を愛達必斯達延諾延（資兔）、鄂巴卓哩克圖諾延（着力兔）、塔噶濟宰桑諾延（宰相）といひ、愛達必斯の三子を阿齊圖達延諾延（阿赤兔）、額成吉炳圖諾延（額勤革）、瑪齊克鄂特罕諾延（麻記）といふものと全く相合致するのを見るであらう。乃ち明史の所傳は誤といふよりも寧ろ略記であつて、資兔は俺答の子ではなく、吉囊の孫だつたのである。

何れにもせよ、資兔は従弟切盤台吉と並ぶ套部の強酋であつて、松山地方に割據し、次第に南方河湟の番族を侵し、その後俺答・吉能等の受款と共にやゝ抑制を蒙つたが、俺答・吉能の死後套部の動搖起るに及び、また益々明邊の患となし

た。是に至つて明朝も遂に堪ふること能はず、萬曆二十六年松山恢復の議を定め、總督李汝・總兵官達雲等が大舉して道を分つて虜巢を搗き、一旦にして四十許年の根據地を奪回して了つた。⁽²⁹⁾この恢復が如何に明人を喜ばしたかは、この後暫く實録の記事はこの問題とを反覆し、「是役や匈奴の右臂を斷つて、甘・寧の輔車を聯ぬ」と狂喜してゐるのに見ても明かである。されば明では再びこの地を失ふまいとして邊垣を修築し、また北虜は之を奪還しようとの希望を棄てず、零寇數次入犯を試みたが、皆達雲等の拒撃するところとなつた。今にこの松山地方を包みて袋の如く圍繞せる長城は、思ふにこの前後に造られたものであらう。

さて松山を逐はれた虜衆は一部西海に遁れたものもあつたが、この時賓兔等は既に死し、弟着力兔・宰相等の子孫は乃ち河套の本據に歸つた。北虜世系には昔のまゝに「在甘州莊浪邊外松山住牧」とあるが、武備志所引の兵略には、「寧夏鎮兩河邊外住牧夷人」として之を記して曰く、

敖忽洞五坐山、是營名、與興武清水營相對、離邊三五百里不等。住牧酋首着力兔台吉故、部落約二千五百有餘。生五子、長子打喇克汗阿不害即朮大又改名合收氣、二子炒克兔阿不害即炒兔黃台吉、在河西住牧、三子那木生革、四子多兒計、五子土罷、女婿炒力可倫不能、新尙不能、農鬼尙不能。打正台吉即宰相故、係着力兔弟、部落約二千五百有餘。生二子、長子松柏、二子松梅、女婿爲正尙不能、爾計尙不能、沙兔尙不能。

とあり、之を源流の系圖に比するに、宰相即ち宰相の子は考へ難いが、着力兔の五子合收氣・炒克兔阿不害・那木生革・多兒計及び土罷がそれぞれ卓哩克圖の五子阿南達和碩齊諾延（合收氣）、綽克圖台吉（炒克兔）、阿穆桑台吉（那木生革）、多爾濟岱青（多兒計）及び圖巴札勒丹（土罷）に當ることは甚だ明かである。なほ兵略によれば、別に

賀蘭山後長流水蒲草泉等處、是營名、離邊二三百里不等。住牧酋首炒兔黃台吉、係河東酋首着力兔二男、部落約五百

有餘、在清水營廠五市。賽兔故、部落約一千有餘、生五子、中衛廠五市。長子那木大、在甘鎮邊外西海住牧、二子我翠革存、三子麻計存、四子土寶故、五子明安兔故。女婿脫計倫不能、克禮東倫不能。

とある。着力兔の二男妙兔黃台吉のことは前にいつた。賽兔の諸子も前に出た阿齊圖（那木大）、額成吉（我翠革）、瑪齊克（麻計）等に外ならぬであらう。彼等はなほ賀蘭山後に残つてゐたのである。皇朝藩部要略世系表によれば、清朝に降附した右翼中旗の祖善丹の父塔爾丹は卓哩克圖・宰桑の父なる巴雅斯呼郎諾顏即ち拜桑固爾の玄孫なりといふ。拜桑固爾の佔據した右翼の扣克特・錫包沁・烏喇特・圖伯特的地は俄に明かにし難いが、着力兔・宰僧の根據地興武・清水兩站の邊外三五百里の地とは大体蒙古游牧記に所謂鄂爾多斯的正西近南に近く右翼中旗の駐牧に當れば、明末以來その形勢には大變無かつたものであらう。今右翼中旗と稱して鄂托克といふ、その故は知らず。

明の兵略は上掲の一條に續けて、寧夏鎮邊外河西の蒙古人を説明し、左の如くいふ。

黃河岸老虎山、是營名。離平虜邊八百餘里、住牧夷人俱在平虜廠五市。酋首丑氣把都兒、部落約一千五百有餘、生五子、長子乞探即獨刺台吉、二子古節氣、三子渠賽、四子土味、五子苦宿大。苦素阿不害即威靜着力兔係丑氣三弟、部落約一千五百有餘、生二子、長子沙阿、二子朶吉、女婿卜味倫不能。尼逆貴係丑氣姪男、部落約一千有餘。弟兄五人、二弟額什革、三弟實班打兒、四弟番答大、五弟矮僧、女婿爛吉倫不能。打兒沙係丑氣姪男、部落約一千有餘、弟兄六人、二弟阿吉大、三弟業克氣、四弟額思克、五弟敏當、六弟納木什哈、女婿同壞倫不能。

賀蘭山後長流水蒲草泉等處、是營名。離邊二三百里不等。住牧酋首……炒哭兒即歹成、係丑氣二弟、部落約一千有餘、生二子、在中衛廠五市。長子矮木素、二子三見、……喇叭即銀定、弟土門大兒係歹成姪子、是叛夷、部落約六七百、每遇生事、向諸酋借兵。

之を源流の系圖に對比すれば、丑氣把都兒は明かに吉婁の第三子衛達爾瑪の次子海努克巴圖爾諾延であつて、その五子は乃ち奇塔特岱巴圖爾（乞探）、固哲格齊固拉齊（古節氣）、固邁墨爾根諾延（土昧）、必巴賽諾延（塞賽）、庫森德諾延（苦宿大）五子に當る。丑氣の三弟威勝力宛とは衛達爾瑪の第六子庫色勒衛徹卓哩克圖であつて、その二子は多爾濟衛徹（朶吉）及び桑鴻台吉（沙阿）である。また丑氣の二弟歹成父子とは衛達爾瑪の第三子阿恰昆都楞岱青（歹成）及びその子衛瑪遜宰桑和碩齊（矮木素）桑奕楚庫克爾諾延（三見）であり、姪男屋逆貴兄弟とは衛達爾瑪の第五子托濟徹辰控庫爾の諸子誇努昆鴻台吉（屋逆貴）、伊實欽台吉（額什革）、薩班達喇台吉（實班打兒）、額斯克勒台吉（番答大）等に當るであらう。たゞその間に弟兄の次序と數とに多少の異同を見るのみである。また歹成の姪子で、喇叭即ち銀定及びその弟土門大兒といふのは阿恰昆都楞岱青の姪で、衛達爾瑪の長子達奇和碩齊鴻台吉の子の喇嘛聯齊爾格隆（喇叭）とその弟圖們達哩徹辰和碩齊（土門大兒）に當るであらう。最後に打兒沙弟兄六人とは恐らく衛達爾瑪の第四子楚噶克青巴圖爾などの諸子かと思はれるが、確かでない。

何れにもせよ、これら數多の酋首がみな衛達爾瑪の後裔なのは明かであつて、皇朝藩部要略の世系表によれば、清朝に降附した右翼後旗の小札木素の父阿津泰は偉達爾瑪即ち衛達爾瑪の曾孫であつて、左翼後旗の沙克札の父薩濟は偉達爾瑪の孫に當るといふ。その衛達爾瑪は源流によれば、右翼の達喇特杭錦及び墨根特巴罕に佔據したものである。今河套の西北隅に近く錫喇布里多泊の東岸にハンキンがあり、この地方に住牧する右翼後旗は Hanggin と呼ばれ、河套の北縁、包頭の對岸地方にある左翼後旗は Dalat と稱せられる。Dalat は正しくは Darhad に綴り、漢字にては打拉忒・達喇特・達爾哈特等に作る。蒙古源流には早くより顯はれた名であつて、恐らく吾學編に所謂吉囊四營の一、打郎が是れであらう。乃ち Hanggin, Darhad は衛達爾瑪の分地杭錦・達喇特である。但し源流によれば、衛達爾瑪の分地は鄂爾多斯の右翼で

あつて、兵略によつても、その子孫の榮えたのは、河西邊外黃河老虎山もしくは賀蘭山後長流水蒲草泉等の處である。これが今の如く東北に退いたのは恐らく額魯特東侵の勢に壓されたのであらう。かくして左右後旗を形成するに至つたのであらう。Tafel氏によれば、今の Darhad 旗は頗る強盛であつて、河套の聖地、成吉思汗の八白室等は皆その世襲の管下に歸してゐるといふ。⁽³⁰⁾

吉襲の第四子諾木塔爾尼に四子あり、その中仲二子は隆慶の末托克摩克 (Togmak) を討つて陣歿したが、長子徹辰鴻台吉は最も智謀があり、源流⁽³¹⁾には博廸汗の母察噶青安桑太后的言として、右翼の五能者を數へたる中に、

墨爾根濟農之子諾木塔爾尼郭翰台吉之子庫圖克台沙津台吉 (庫圖克圖徹辰鴻台吉) 則稱爲能知既往未來之默爾根。

と見え、また察哈爾の圖們汗が右翼の執政理事を擧げた中に、博碩克圖濟農を措いてこの台吉を數へてゐる。萬曆武功錄⁽³²⁾の切盡黃台吉列傳には「切盡爲人明敏、而嫻於文辭、尤博通內典」といひ、俺答の封貢に當つても「切盡親爲表文」といふ。また

是歲、吉能死、切盡日夜傷世父、亟遣套治喪、所過道上、皆以搶番爲戒。當此時、切盡與威正恰把不能、雄視一套、投足左右、便有輕重。崇古恐有不測、乃欲以好爵縻之。於是、請稍遷切盡與威正恰把不能、爲指揮同知。

とある。威正恰他不能は前にも云つた「威正恰把 (他の誤) 不能者、吉能婿也、或云威靜哈唐不浪、住牧嘉峪關外」とあるものである。切盡黃台吉はその後龍虎將軍に任ぜられた。されば源流にこの人を讚稱し、夙に瓦刺西番征服に功あり、俺答の受款にも與つて力を致し、殊に喇嘛教の輸入に大功ありとしたのも、必ずしも曾孫薩囊徹辰の溢美ではない。庫圖克圖とは喇嘛の尊稱であつて、徹辰とは蒙古語で聰明の義である。右翼の五能者の中他の四者はみな剽悍を以つて聞えたのに、徹辰鴻台吉のみはその智謀を畏られたのである。明の記録にもその西掠及び喇嘛信奉のことを傳へ、その通貢の

ことも葉氏四夷考には俺答受封の時切盡等その營にあり、自ら進んで貢市を求め、隆慶五年八月叔父吉能と共に逸早く紅山墩及び清水營の開市を得たとあり、全邊略記四陝西延綏略には萬曆十五年(32)その死を悼んで、「諸貢虜惟切盡最服漢義」と見える。思ふに聰明なる鴻台吉は俺答と共に當時隨一の指導者だつたのである。武備志三七鎮戍寧夏の條によれば、

兵略曰、寧夏兩河邊外住牧夷人、河東邊外住牧夷人、俱在清水營廠互市。(33) 跨馬梁・青沙湖是河套營名、與榆林・清平・

定邊相對、離花馬池邊五百餘里住牧。酋首切盡黃台吉並妻妣妓故、係已故蘄台吉男婦、部落約三千有餘、生六子、長子捨打大、二子苦的大、三子本言大、四子本的大、五子奔把什力、六子打刺什力、女婿齋生倫不能、黃台吉弟琴賽台吉。貼賴即鐵雷係黃婦姪男、部落約一千有餘、滿克素阿不害即火落赤、係黃婦姪男、部落約二千有餘、生四子、長子補打太、二子補打奈、三子卜彥阿不害、四子卜思合兒、女婿敖骨大倫不能、根不倫不能、把兔係黃婦長孫、部落約一千五百有餘。

とあり、之を源流に比較するに、切盡黃台吉(徹辰鴻台吉)の亡父蘄台吉とは恐らく諾木塔爾尼の別訳であらうし、その六子は早世した長子鄂勒哲依伊勒都齊を除いた以下の錫塔台徹辰楚庫克爾(捨打大)、昆都德賓圖岱青(苦的大)、布延岱徹辰卓哩克圖(本言大)、本巴岱緯克圖台吉(本的大)、本巴錫哩徹辰巴圖爾(奔把什力)、達納錫哩哈坦巴圖爾(打刺什力)等六子に當り、長孫把兔とは鄂勒哲依の遺子巴圖徹辰鴻台吉であつて、乃ち源流の著者薩囊徹辰洪台吉の父である。捨打大は明史三二魏學曾傳には捨達大に作り、その母所謂黃婦と共に有名な強隣である。なほ黃台吉の弟琴賽台吉とは恐らく唯一生存の末弟阿穆達爾墨爾根台吉であつて、貼賴即ち鐵雷はその子圖壘青古拉齊のことであらう。滿克素阿不害即ち火落赤とは陣歿せる仲弟布延達喇克拉克齊巴圖爾の遺子莽固斯額爾德尼郭拉齊であらう。その四子の名は源流にも見えない貴重な所傳である。なほ兵略には「迤西綽水・波羅・定邊一帶邊外、黑河・打狼河・明水湖・跨馬梁住牧夷人切盡黃台

吉等、部落約三萬有餘、離邊二三百里不等、接連寧夏地方花馬池、在延綏紅山互市、在寧夏清水營互市」とあり、酋首の名前を列擧してあるが、要領を得ないから姑く省く。源流によれば、徹辰鴻台吉の嫡流、鄂勒哲依・巴圖等みな勇名あり、巴圖の子源流の著者薩囊徹辰も夙に博碩克圖濟農の信任を得て、河套執政の大臣だつたことは既述の通りである。

兎も角もこれらの諸酋が皆河套の西南邊に繁延したことは明かであつて、遊牧記に所謂河套西南の右翼前旗即ち今の Usiin 旗の地方に當る。Usiin は乃ち諾木塔爾尼の分地、右翼巴蘇特衛新の衛新であつて、吉囊の阿爾禿斯四營の一、偶甚もこれに當るであらうし、今左翼中旗の西南方に烏先府がある。皇朝藩部要略の傳ふところ、右翼前旗の祖、清朝に降附した額琳沁の父布達岱は諾木塔爾尼華台吉（諾木塔爾尼）の曾孫なりといふ。布達岱とに莽固斯郭拉齊の長子補打大であらう。蓋し莽固斯は薩囊徹辰と並んで河套執政の大臣たりしもの、而して嫡流の薩囊徹辰は察哈爾汗に好意を表して、清朝の好感を失つたものであるから、莽固斯の後だけが後に残つたのであらう。

吉囊の第五子布揚古資の二子を伯勃格岱細諾延といひ、布爾賽徹辰岱青といふ。之を源流六の察哈青安桑太后の言によれば、右翼の五能者を擧げた隨一に、

會聞、賽音阿拉克之長子衮必里克墨爾根濟農之子布揚鄂資都噶爾岱青、人稱爲見敵則不退縮、擊之則被堅死戰、勇於戰鬪之大巴圖爾。

とあり、ついで俺答の長子黃台吉、諾木塔爾尼の子徹辰鴻台吉を擧げた末にまた、布揚古資の二子を數へて、

布揚鄂資都噶爾岱青之子伯爾格岱細台吉、則張弓、能兩臂相向、遂稱爲鄂勒博克圖鄂庫克、能將馳狐之尾、按節射斷、伊弟布爾賽哈坦巴圖爾能穿射三斂。

とあるより見れば、布揚古資の一族に勇者が多く、その強盛は當然に想察せられる。而も皇朝藩部要略によれば、右翼前

末旗の祖烏巴什は波揚呼哩都噶爾岱青（布揚古齊）の曾孫なりと傳ふ。遊牧記に烏巴什の號を都噶爾岱青としたのは乃ち會祖布揚古齊の稱號を襲つたものであらう。この一族が明代を通じて繁昌したことは明白に過ぎたことで、北虜世系によれば、布揚古齊のことを歹成都喇兒台吉といひ、その子の伯勒格岱綳（歹崩把都兒台吉）には一子、布爾賽徹辰岱青（七慶歹成台吉）には七子もあつたといふ。然るに他の記録にはそれと覺しきものを傳へず、兵略は當時の虜酋名目を擧げて殆ど遺漏なきものなるに係らず、その中に彼等に比定すべき酋名は發見出來ない。強ひて求むれば、萬曆武功錄^四卷一に「禿退台吉者歹成子也、授指揮僉事」、「阿計大台吉者禿退之子也」とあり、また「哈漢把都兒台吉者禿退之弟也、授指揮僉事」、「圪塔台吉者哈漢把都兒之長子也」、「把禿台吉者、哈漢把都兒之次子也」、「歪利台吉者亦哈漢把都兒之子也」などゝあるものによつて系圖を作成し、歹成は即ち布揚古齊岱青、禿退は恐らく伯勒格岱綳、阿計大は阿津岱綳とし、哈漢把都兒は布爾賽徹辰巴圖爾、圪塔はその子の薩台か薩濟か、歪利は衛拉特墨爾根諾延で、把禿は巴圖特台吉に當つべきものであらう。右翼の伯特金・哈里郭沁の地も審かでないが、かくすれば、右翼前末旗の系譜もやゝ明かである。

吉囊の第六子班札喇衛徵諾延は鄂爾多斯左翼前旗の遠祖である。源流によれば、その長子を多爾濟達爾罕岱青といひ、孫を明愛青岱青といふ。北虜世系に克鄧威正台吉の子打兒汗歹成台吉及び孫明暗台吉といふものが是れである。「在榆林以東邊外住牧」といふ。武功錄^四卷一には「明愛台吉朶兒計（多爾濟）之子也」とあり、「顯與卜失兔・莊兔賴爲黨」とある。莊兔賴は即ち威正莊禿賴台吉で、班札喇の次子鐘都齊衛徵諾延である。武備志^七卷二鎮戍延綏の條引く所の兵略によれば左の如くある。

迤東神木・孤山・黃甫川建安一帶邊外、樺子山・脫兒川・鎮川住牧酋首威正等、部落約六千有餘、離邊三百餘里。酋首威正即莊禿賴台吉故、炒忽兒台吉存、沙計台吉存、歹齊台吉故、揆太賽林故。

威正とは鐘都資の號衛徵の別譯に外ならない。妙忽兒とはその子翁奎筵庫克爾をでもいつたのであらう。右翼中族の連東神木から河曲にかけた邊外によるといへば、乃ち今の左翼前旗の位置である。今左翼前旗を稱して準葛爾といふのは Shon-Gar の音譯で、即ち左翼旗の義に外ならない。皇朝藩部要略世系表によれば、後に清朝に降附した色稜は父固嚕は巴雅喇偉徵諾延即ち班札喇の曾孫に當るといふ。

吉夔の第七子巴特瑪繖巴幹は嗣なくして死んだが、その弟阿穆達喇達爾罕諾延はその子に圖墨德達爾罕岱青あり、孫の本拜岱青諾延に及んだといふ。武功錄卷一に「土昧阿不害者、打兒漢台吉之長子也、授指揮僉事。萬曆丙戌(一五六六)冬、打兒漢赴紅山市、染漢地痘病死、制置使鄧洛憐土昧阿不害在市久勞苦、而請以土昧阿不害襲父指揮同知、而以所遺僉事秩、屬其子本拜台吉嗣」とある。打兒漢(達爾罕)、土昧阿不害(圖墨德)、本拜台吉(本拜)に當るであらう。打兒漢台吉の名は前に引いた穆宗實錄隆慶六年七月兵部左侍郎石茂華の言にも見え、通貢傳にも吉能の弟とあり、全邊略記卷四萬曆二年の條にも「吉能之弟打兒漢」とあり、明史卷三九杜桐傳によれば、萬曆十九年冬、打兒漢子土昧與他部明安互市訖、復臨邊要賞、騷犯內地・桐……率輕騎、自榆林、三道並出、遇寇力戰大破之、斬首四百七十餘級、識明安而還。延綏自吉能納款、塞上息肩二十年、自此兵端復開、明安子擺言大日思報復、寇鈔無已時矣」と見える。打兒漢・土昧が達爾罕、圖墨德なることは勿論、明安・擺言大も乃ち阿穆達喇の次子明安額葉齊諾延及びその子布延台音札諾延であらう。なほ明史卷三九官秉忠傳や韃靼傳に見えて、萬曆末年の頃に跳梁した叛夷の旗牌台吉や猛克什力台吉といふのは、兵略によるに、切盡黃台吉の右翼前旗と隣接混住したものであるが、乃ち上述の明安の弟必巴錫台吉、及び第三子蒙克錫哩台吉に外ならざるやうである。

吉夔の末子鄂克拉罕伊勒登諾延は武功錄卷一に「銀錠台吉吉能之弟也、授指揮同知」とあるものであらう。銀定の名は

明史三九二官秉忠・柴國忠傳に散見する。遼爾罕諾延の分地は右翼四鄂托克衛鄂爾沁といひ、伊勒登諾延の分地は右翼三鄂托克阿瑪該といふが、何れも後嗣なく、今の何處だか解らない。但し北虜世系には「各酋俱在榆林・孤山邊外住牧」とある。

さて以上を要するに、右翼濟農の全盛は袁必里克濟農の一代を以つて終り、その子諾延達喇濟農は既に河套一隅の部長たるに過ぎず、博碩克圖濟農以下に至つては、その河套すら全く統制を失ひて分裂し、濟農は徒に空名を擁してやゝ群酋の雄たるに過ぎなかつた。されば衰餘の明人すらその弱勢を侮りては「寇弱くして禦ぎ易し」といひ、また或は「衆雖號十萬、分爲四十二枚、多者不過二三千騎、少者一二千騎、……須主戰以張國威」と主張した。今これら諸酋の興廢を研究するは寧ろ大勢に係るところはない。以上酋名の比定は或ひは明史等を讀むに多少の参考になるべきだけであらう。

註 (1) この前後の記事は専ら明史西番諸衛伝による。明史本紀及び達雲伝等によれば李奎はまた李魁に作る。蓋し普通である。

(2) 和田清「兀良哈三衛に関する研究」(滿鮮地理歴史研究報告十三、三三六―三八頁)。

(3) 同上、四〇九―四二六頁。

(4) 中島竦氏「蒙古通志」三一四頁。

(5) 大明世宗実録嘉靖二十年九月壬子、山西按察司副使胡松疏。

(6) 同上、嘉靖二十五年七月戊辰、總督宣大侍郎翁万達奏、及び同二十六年四月己酉の条。

(7) 明史卷二二二呉兌伝。老把都・辛受二人の外に吉能及び永邵卜大成台吉も少しく遅れて都督同知に任じ、当時蒙古の四都督の語があつた。

(8) 国朝献徵録所收俺答後志、明史卷二二三張学顔伝、卷二三九官秉忠伝等。

(9) 蒙古源流卷六、蒙古游牧記卷七土謝圖汗注。

(10) 大明穆宗実録隆慶四年十二月甲寅、總督王崇古言。

(11) 和田清「察哈爾部の変遷」七、土默特支部の東遷。

(12) 同上、六、朵顏衛と喀喇沁部。

- (13) 和田清「遠延汗について」七、小王子宗党部落。
- (14) 同上、一〇、西方の諸部落。
- (15) 和田清「豊州天徳軍の位置について」史林一六ノ二(昭和六年四月)
- (16) 説史方輿紀要卷四四大同府大同県、晋家の条。
- (17) 大清一統志卷四一〇之一、威寧海子及び四一〇之二、九十九泉。
- (18) 説史方輿紀要卷四四、山西行都司、得勝堡、殺虎堡及び新平堡の条。
- (19) 中国古今地名大辞典、水泉堡の条に「在山西偏関東北六十里、北至边墙二里、堡爲明宣德中所築、稍南爲紅門口、均爲出塞処要道」とある。
- (20) 恰台吉は即ち俺答の義子脱脱である。
- (21) 万曆武功録^七俺答列伝上に「是時打来孫・瓦刺・兀良哈皆小部、打来孫依套隣、它皆居雲中西北、依俺答。而会小王子裔孫土蛮、方分爲四枝、曰多羅土蛮把都黃台吉、曰麦力昆台吉、曰著力兔台吉、曰克鄧台吉、擁衆十余万、恃其蕃盛、數与俺答争強、盛爲勦逐迤東患害」とある。これは主として国朝獻徵録一二〇所取の通貢伝に基づいたものであるが、とも角非常な誤解で、この多羅土蛮と勦逐辺外の察哈爾部土蛮(岡們汗)とを混同した叙述に外ならぬ。それでも多羅土蛮把都黃台吉、麦力昆台吉、著力兔台吉、克鄧台吉の名前だけは正しい。
- (22) 陽和は今の陽高である。守口堡については説史方輿紀要卷四四参照。
- (23) 蒙古源流箋証卷六法。
- (24) 江実訳「蒙古源流」注二九頁(卷六註三四)。
- (25) 吉甕子小十王戦死のことは葉氏四夷考、明史韃靼伝等に見えている。
- (26) 威正恰他不能のことは万曆武功録卷十四威正恰把不能列伝に見えている。
- (27) 葉向高「四夷考北隣考」、明史紀事本末俺答封貢及び明史韃靼伝等参照。
- (28) 張爾田「蒙古源流箋証」卷七註。
- (29) 大明神宗夷録万曆二十五年十一月丁亥、同二十七年正月庚寅、明史卷二三九達雲伝、同韃靼伝、同西番諸衛伝参照。但し総督李汝を韃靼伝には李汝に作る、今夷録による。
- (30) Albert Tafel, Meine Tibetrise, I, s. 103. Note 1.

- (31) 蒙古源流卷六。
- (32) 蒙古源流には徹辰鴉台吉の歿年を歲次丙戌（万曆十四年）とする。
- (33) 中国古今地名大辞典によれば「清水營堡、在甘肅靈武東八十里、明正純間築城、隆慶間設馬市於此」とある。
- (34) 明史卷三三九王保伝。
- (35) 明史卷三二七韃靼伝。